

平成 28 年 6 月 1 日

井原市における地域創生への取組みと学生参加の可能性

岡山大学地域総合研究センター長
大学院社会文化科学研究科 教授
三 村 聡

はじめに

岡山県井原（いばら）市は、県西南部に位置し、西は広島県に接しています。高梁川支流の一級河川・小田川が、市の南部を西から東へ貫流し、その流域の平野部に市街地が形成されています。北部には標高 200～400 メートルの丘陵地帯が連なり、吉備高原へと続いています。市の面積は 243.36 平方キロメートルで、市街地を除いては、ほとんどが山々に囲まれた農山村です。全体的に温かな気候に恵まれ、年間平均気温は 13～15 度、年間降水量は 1,200 ミリメートル前後となっています。



平成 17 年 3 月 1 日、生活・経済・交通圏などで密接な結びつきのあった、井原市、後月郡（しつきぐん）芳井町（よしいちょう）及び小田郡美星町（びせいちょう）の 1 市 2 町が合併し、現在の「井原市」が誕生しました。平成 28 年 4 月末時点の人口及び世帯数は、人口が 4 万 1,918 人、世帯数は 1 万 6,746 世帯です。

また井原市は、小田川沿いの桜の名所をはじめ、様々な名所旧跡や景勝地、NHK 大河ドラマはじめ映画のロケで使われる「歴史公園中世夢が原」、そして沖縄県石垣島、長野県南佐久郡南牧村野辺山と並んで星の観測適地として知られる美星町の「美星町天文台」、伝統芸能の「備中神楽」、食材では、地酒「蘭の誉（らんのほまれ）」、美星町の特産「豚」「牛」やその加工品、美星バーガー、蕎麦打ち道場、良質乳と極上ジェラート、新鮮野菜と加工品、さらに、県立井原高校による花卉・園芸活動、主要産業のひとつである「井原デニム」など、数々の魅力にあふれています。一方で、急速な人口減少や、市と近隣都市を結ぶ唯一のローカル線「井原鉄道」の乗降客の減少、企業誘致の停滞といった課題も抱えています。

本稿は、この井原市で、内閣府地方創生本部の「地方創生人材支援制度」による派遣一期生として市政策定のお手伝いをした筆者の、これまでの活動状況や思いを綴ったものです。地方創生に関わる行政、教育機関、市民や学生など、多くの方々のご参考になれば幸甚です¹。

¹ 井原市が策定した『元氣いばら まち・ひち・しごと創生 人口ビジョン』及び『元氣いばら まち・ひと・しごと 創生総合戦略』（平成 28 年 2 月）の内容（全文）は井原市の HP よりご参照ください。

1. 地方創生と国の対応

わが国の地方都市で急速に進行する人口減少は、国全体の経済社会に大きな影響を及ぼしています。その主たる要因は、東京圏へ一極集中する人口移動の偏りにあると考えられています。また、同一の道府県内でも、道府県庁所在地へ周辺都市から人口が移動するという現象に歯止めがかかりません。

こうした状況を是正するためには、これまで以上に、各自治体が自らの地域の人口動態や将来人口についてしっかりと把握し、自ら推計した「地方人口ビジョン」に基づいて、地元産業の実態や、国の総合戦略などを踏まえた「地方版総合戦略」を策定する必要がある、と国は考えています。一方で、現在の国の財政は非常に厳しい状況にあり、国が全国の自治体に対して従来どおりの財政支援を行うことに限界がきています。そこで国は、これまで交付金による財政支援一辺倒だったものから、情報・人材をはじめとする各種側面からの支援へと、政策転換を行いました。具体的には、①地域社会への雇用創出、②人口流出への歯止め、③若年世代の結婚・出産・子育て、を支援して持続可能な地域社会を作り、加えて、地域間の連携を推進することで、地域活性化の好循環が維持されるような社会の実現を目指しています。2020 年に向けた総合戦略で国が掲げる具体的目標を紹介しますと、①地方の若者の雇用数 30 万人（2015 年：5.9 万人）、②若い世代の正規雇用労働者（自らの希望による非正規雇用労働者等を含む）の割合を他の年代と同水準に引き上げる（2014 年における 15～34 歳の割合：92.7%、全ての年代：93.7%）、③女性就業率 77%（2014 年：70.8%）、④地方から東京圏への人口流入 6 万人減少（2014 年：1,732 人増加）、東京圏から地方への人口移動 4 万人増加（2014 年：1 万 1,152 人減少）、⑤安心して結婚や出産・子育てができる社会の実現と、第一子出産前後の女性の継続就業率 55%（2010 年：38%）、結婚希望実績指標 80%（2010 年：68%）、夫婦あたり予定子供数（平均 2.12 人）の実現率 95%（2010 年：93%）、⑥公共交通の利便性の全国平準化による地方都市における移動性の向上：（三大都市圏 90.8%（2014 年度：90.5%）、地方中核都市圏 81.7%（同：78.7%）、地方都市圏 41.6%（同：38.6%）、地域公共交通網形成計画策定総数 100 件（2015 年：60 件））となっています。こうした施策を実現することで、長期ビジョンとして「希望出生率 1.8」を達成し、東京一極集中を是正し、2050 年台の実質 GDP を 1.5～2%に維持しながら、2060 年に一億人前後の人口を維持・確保できる社会を実現しようとしているのです。

そのために、国は、それぞれの自治体に「地方版総合戦略」の策定を促し、その戦略に対して交付金を交付する、という施策を展開しています。「地方版総合戦略」の策定に際して、国は自治体に対して、いくつかの重視すべき条件を課しています。その条件とは、①自治体独自の人口ビジョンを念頭に置きながら、住民の声に幅広く耳を傾け、その意見を反映して戦略を策定しなければならない、②そのためには、従来の産学官の関係性に留まらず、一步踏み込みこんだ一層強固な地域の連携関係を構築する必要があり、地域金融機関や労働組合、マスコミなど、地域を構成するステークホルダーと幅広く連携して、市民の声を反映した官民連携の戦略を目指さねばならない（守旧的な「知らしむべし、寄らしむべからず」と

いう役所的発想からの決別)、③戦略の具体的な施策が、官民連携を要件とした、自治体固有の独自性・自立性・先駆性に富んだ事業である必要がある、④国の掲げた数値目標と同様に、各自治体は、目標達成に向けて具体的な数値目標を立て、その進捗状況を継続的に計測する「重要実績評価指標 (KPI: Key Performance Indicator)」を設定しなければならない、⑤立案された事業では、民間資金の誘発を可能とするシナリオを策定し、将来的には国からの交付金に依存しない、自主・自立したビジネスモデルの構築を促す流れが生まれる施策でなければならない、⑥こうした仕組みがうまく循環するよう、Plan (計画)、Do (実行)、Check (確認)、Action (行動)の4つのステップで構成される「PDCA サイクル」²と呼ばれる行動プロセスに基づいて戦略を策定する必要がある、というものです。

すなわち「地方版総合戦略」政策は、地方自治体自らが策定した戦略の内容と、そこに掲げた具体的な数値目標を、国(内閣府地方創生本部や関係主務官庁)が吟味・精査して交付額や対象事業を決定、さらに、戦略施策の進捗状況を国が検査し、その進捗如何によっては見直しや交付の変更を行う、という内容になっているのです。もちろん、住民自身も戦略施策の進捗状況を可視化してチェックします。

ちなみに、国が2010年に向けた総合戦略として設定している主なKPIを紹介しますと、6次産業化市場10兆円(2013年度:4.7兆円)、農林水産物輸出額1兆円(2014年:6,117億円)、訪日外国人旅行者消費額4兆円(2014年:2.0兆円)、地域の中核企業・中核企業候補の支援1000社(2015年度の施策を踏まえ検証)、雇用数8万人創出(2014年度:1,000人)、年間地方移住あっせん件数1万1,000件(2014年:約4,000件)、企業の地方拠点機能強化件数7,500件増(2015年:808件)、地方雇用者数4万人増(2015年:6,600人)、地元大学進学割合平均36%(2015年度:32.3%)、若者就業率78%(2014年:76.1%)、支援ニーズ高い妊産婦への支援実施100%、男性育児休業取得率13%(2014年:約2%)、住民活動組織(地域運営組織)形成数3,000団体(2014年度:1,656団体)、連携中枢都市圏形成数30圏域(2015年:4圏域)、中古・リフォーム市場規模20兆円(2013年:11兆円)となっています。

そして、こうした数値目標を策定するためには、これまで以上に、各都道府県・市区町村が客観的なデータに基づき、自らの地域の現状と課題を把握し、その特性に即した地域課題を抽出して「地方版総合戦略」を立案することが重要となります。このため、国(まち・ひと・しごと創生本部)は、これまで経済産業省が開発を行ってきた「地域経済分析システム」、いわゆる「ビッグデータを活用した地域経済の見える化システム」に、経済分野に限らずさまざまなデータを搭載することで、地方自治体が「地方版総合戦略」の立案等をする際に活用できるシステムへと再構築し、平成27年4月21日から提供を開始しました。この「地域経済分析システム」は、英語表記 (Regional Economy (and) Society Analyzing System)

² この考え方は、企業において事業推進やリスクマネジメントを段階的に円滑に行なう手法、さらにはその事業評価を行なう基準として導入・適用され、公共分野においては、国や自治体が進める事業を円滑に推進するために採られています。

の頭文字を取って、“RESAS”（リーサス）³と呼ばれ、数値による分析を施策に反映することを可能にするものです。

本稿では、リーサスの利用体験について後述します。

2. 「地方創生人材支援制度」について

さて、国は、わが国の将来を切り開く「地方創生」政策を人材支援の面から展開するために、内閣府地方創生本部を担当部署として、「地方創生人材支援制度」⁴を導入しました。この制度の下に、平成 27 年 4 月 1 日、全国から 69 名の人材（国家公務員 42 名（派遣府省別に見ると、内閣府 1 名、財務省 4 名、経済産業省 5 名、金融庁 1 名、文部科学省 2 名、国土交通省 11 名、総務省 8 名、厚生労働省 3 名、外務省 1 名、農林水産省 6 名で、全て常勤職員）、大学 15 名、民間 12 名）が、第一期生として、人口 5 万人以下の自治体に派遣され、「人口ビジョン」と「地方版総合戦略」策定をサポートすることとなりました。

文部科学省からの働きかけもあり、岡山大学からは、筆者が、平成 27 年 4 月 1 日付けで、岡山県井原市へ 2 年間の任期で派遣されました。国から派遣される担当者は、平成 27 年 3 月 22 日～24 日の 3 日間、永田町の合同庁舎で開催された事前研修会に参加し、わが国が直面する人口減少と高齢化進行への対応策、雇用創出に向けた産業の活性化施策など、幅広く施策立案を支援するようにとアドバイスを頂きました。また、首相官邸で激励を受けました。第 1 期生に求められることは、地域の強みを伸ばし、自立型地域再生を呼び起こすこと



首相官邸での激励会

³ RESASは、「産業マップ」「地域経済循環マップ」「農林水産業マップ」「観光マップ」「人口マップ」「消費マップ」「自治体比較マップ」の7つで構成されています。

⁴ 地方創生に積極的に取り組む市町村に対し、意欲と能力のある国家公務員や大学研究者、民間人材を、市町村長の補佐役として派遣し、地域に応じた「処方せんづくり」を支援する制度。目的は、自治体（井原市）が自らの知恵を絞り、地域の活力を発揮するための「地域の独自性を活かした地方版総合戦略」を策定する、そのサポートをすることです。

です。安倍晋三内閣総理大臣の「平成 27 年度地方創生人材支援制度激励式」での訓示を、総理大臣官邸のホームページから脚注に引用します⁵。

こうして、平成 27 年 4 月 1 日、井原市役所において、瀧本豊文（たきもと とよふみ）市長から「元氣いばら創生戦略本部」（本部長：瀧本豊文市長、以下、創生戦略本部という）の創設宣言がなされ、井原市が直面している課題の解決に向けた創生戦略の方向性について、迫力ある訓話がありました。その後、元氣いばら創生戦略本部が置かれた井笠地域地場産業振興センターへ移動して、看板除幕式が行われました。続いて、井原市が生んだ近代彫刻界の巨匠・平櫛田中（ひらくしでんちゅう）（1872-1979 年）の大作「鏡獅子」がモチーフのゆるキャラ「でんちゅうくん」が、「いばら営業部長」に任命されました。

早速、4 月 14 日には、「第 1 回元氣いばら創生戦略本部会議」が開催され、本部長を務める瀧本市長の挨拶と方針提起で議論がスタートしました。地方創生総合戦略の策定は、従来以上に市長の決断と実行が求められる作業です。瀧本市長は、「元氣いばら まち・ひと・しごと創生 人口ビジョン・総合戦略」の策定に向け、創生戦略本部を本格始動させ、現在、取組みが展開されている第 6 次総合計画の施策に沿いながら、新たな創生戦略を市民の総意により検討・策定する必要性を強調されました。なお、建設経済部長が地域創生監に任命されました。また、所管部署として 4 月から「地域創生課」が設けられ、地域産業の活性化や定住促進、商工業の振興、観光資源・特産品の PR・イベントなど、元

⁵ 「本日は、地方創生人材支援制度第 1 期生の皆さんとお会いできることを大変うれしく思います。第 1 期生というのは、なりたくても、なかなか入れない訳でありまして、正に皆さんしかなれなかったと、このように思います。今回は、北は北海道の鷹栖町から南は沖縄県の石垣市まで、総勢 69 名が全国各地の市町村に派遣されることとなりました。派遣される市町村のうちで最も小規模な自治体は、人口が 345 人の新潟県の粟島浦村と聞いています。皆さんは、様々な志を持って自ら地域で働くことを志願されたと、選択された、というふうに向っています。恐らく不安もあるとは思いますが、地方創生に大いに力を発揮していただくことを期待しています。『落下傘のように地域に入るのではなく、地域で何かをやりたいと思っている人と組み、東京のネットワークがあるからこそできることがある。』、東京から四国に移住して IT を活用した仕事づくりに携わっている方の言葉であります。皆さんの目線で多くの魅力を発見し、市町村長の良き補佐役として、地域で新たな風を巻き起こしていただきたいと思います。正に皆さんは、安倍政権がこれから進めていく地方創生の中核になっていただく皆さんだと思います。正に、皆さんの成功が地方創生の成功につながっていく訳であります。第 1 期生というのは、正にフロンティアだと思います。そして、皆さんの仕事もフロンティアであり、地域の皆さんと共に何か新しい事をやりたい。こう思っているんだろうなと思います。しかし、もちろん各地方には、それぞれの様々な事情もあります。地域に行ってもですね、いろんな人たちと会って、話を聞きながら、何をすればいいのか、ということをや日々考えながら、頑張りたいと思いますし、皆さんの能力を大いに生かしてもらいたいとも思います。この中には、私の地元の長門市に行っていたと、木村さんがいると思います。どんな問題があるか、どんな課題があるかは、よく私が人間関係も含めてですね、教えてあげたいと思います。地方には様々な濃密な人間関係があります。まず、その事をよく理解しながら、どのようなネットワークを構築していき、みんながどんな思いを持っているのか、何を悩んでいるのか、どんな夢を描いているのか、そういうことを皆さん、その地域に住んでいる皆さんと一緒に、感じていただきたいと思います。そして正に、各地域がこれから活力を持って伸びていく、そういう地域になっていくために、皆さんが、2 年間と聞いていますが、この 2 年間で大きな実績を残していただくことを期待したいと思います。皆さんが志を果たされることを大いに期待して、私の激励の挨拶としたいと思います。頑張ってください。」

気なまちを次世代に継承するため、地域創生に係る施策を積極的に推進していくことになりました。

地域創生課は、4つの係に分かれて一体的に運営されています。①地域創生係（地域創生施策の総合推進、土地開発公社との調整、課内の庶務及び他の係の主管に属しない業務）、②魅力発信係（地域創生事業の発信、営業活動、「でんちゅうくん」に関すること）、③商工係（商工（鉱）業の振興、貿易、工業等振興奨励金に関すること、企業立地及び工業適地調査、商工（鉱）業の統計調査、計量器に関すること、労働福祉、関係機関及び団体との連絡調整、その他商工（鉱）業に関すること）、④観光係（観光資源の調査及び開発、公園等の観光地及び観光施設の維持管理、経ヶ丸グリーンパークに係る諸施設の運営、広域観光、温泉、物産品の育成、開発指導等、関係機関及び団体との連絡調整、その他観光及び特産品に関すること）、の4つです。



向かって右が瀧本豊文市長、左が筆者

さらに6月4日、市民の声を広聴し、具体施策に反映させることを目的として、外部組織「元気いばら創生戦略会議」（以下戦略会議という）が設置されました。委員は19名、外部有識者（岡山大学）、行政機関（岡山備中県民局）、商工関係団体（井原商工会議所など）、各種団体及び公募委員などで構成され、井原市の総合戦略の策定に関してご意見やご提言を頂き、これまでの総合計画に基づいて実施された施策の吟味や、新たな施策策定に向けた議論を頂くこととなりました。同日開催された「第1回元気いばら創生戦略会議」では、冒頭、創生戦略本部長を務める瀧本市長から挨拶があり、選任された委員の自己紹介に続いて、地域創生戦略顧問として筆者が内閣府の方針に基づき「地方創生戦略」の目的と狙いを説明しました。

続いて会長・副会長の選出があり、会長には岡山大学地域総合研究センター副センター長の前田芳男准教授、副会長にはNPO法人みんなの集落研究所の阿部典子首席研究員と、井原商工会議所の川井眞治会頭（日本綿布株式会社社長）が選ばれました。第1回戦略会議は、前田芳男会長の進行により、事務局から「元気いばら まち・ひと・しごと創生 人口ビジョン・総合戦略策定にあたっての基本的な考え方」が示され、それを受けて、全委員が意見や感想を述べました。また、今後の進め方について了解を頂き、地域創生監の挨拶で閉会しました。



元気いばら創生戦略会議の風景

市民参加による地方創生の核となる戦略会議のスタートにより、本格的に井原市の地方創生が始動しました。

3. 井原市「地方版総合戦略」の策定と諸活動

(1)「元氣いばら創生戦略会議」の活動

7月6日、市民参加による地方創生を目指して、「第2回元氣いばら創生戦略会議」が井原市地場産業振興センター3Fの経営研修室にて開催されました。“産・官・学・勤・労・言”の各方面の代表者や公募で選ばれた委員に加えて、市の職員もメンバーに加わり議論が展開されました。戦略会議の前田芳男会長から挨拶があり、早々に前田会長の進行で5チームに分かれてワークショップが始まりました。

まず、ウォーミングアップとして、井原市でお気に入り（風景やスポット、お店や資源など何でもOK）をひとつ、まちの課題をひとつ挙げて、それらを高校生に説明することを想定してもらいながら、黄色のポストイットに書く作業からスタートです。「出来るだけ具体的に、そして市の職員は議会答弁のような表現にならないように」と、前田会長がアドバイスされました。また、「思いつかない、という回答もありです」と、ワークショップへの参加が始めての方への配慮もされました。そして、書き終わったところで、模造紙の左上あたりへ貼り付けてもらい、全員が貼り終わったタイミングで、自己紹介を兼ねて、各人がその理由を説明しました。



説明する前田芳男会長（写真右、立っている）

次に、緑のポストイットに「具体的に、何が良かったから井原市に今まで住んできたのか」、という思いを、青のポストイットに「井原でいま出来ることは何で、ここまでやれたら良いまちになるよね」という具体的な施策を書いてもらう作業に入りました。前田会長からは、参加者が書きやすいように具体的な事例を挙げて説明がありました。そして、書き終わった段階で、最初の人を読み上げながら模造紙に貼ります。そこで、同じ意見の方がいれば、「私も同じです」と言って、自分のポストイットを模造紙に貼ることにします。こうして、次々と全員が説明し終わるまで作業が続けられました。そして、そのチームで出された意見や施策案の中で、各自、自分が一番気に入った内容をひとつだけ黄色のポストイットに書き出してもらいます。

そこまで作業が終了したら、そのチームに一人を残して、後の人は別のテーブルへ移動します。つまり、メンバーを変えて次のワークショップに臨みます。席替えが終わったところ

で、まず、移動しなかった人が、これまで自分のチームで議論されてきたことの要諦を、他のチームから移動してきた方々に披露します。それを起点に、他から来た人が順番に、自己紹介を兼ねて、自分が持ってきた黄色のポストイットを示しながら、自分のチームがこれまで議論してきた内容を説明します。つまり、各チームで話し合われた内容を全員が共有する作業が行われました。



そして、最後の作業として、前田会長から、井原市が生んだ彫刻家、平櫛田中の名言「いまやらねばいつできる、わしがやらねばたれがやる」を引用して、緑のポストイットに①「わたしがやらねばならぬこと」、青のポストイットに②「いまやらねばならぬこと」を書き出す作業が指示されました。そしてその内容を、チームごとに代表者が決意表明として発表しました。

以下は、発表・提示された内容です。

第1班：職業と地域づくりの分業化（平日の昼間は仕事、夜と休日は地域づくりに取り組めるまちづくり）、新規就農を促進するための近所組織の構築（安心して就農できる受け入れ体制の構築）。

第2班：日本綿布株式会社を核としたデニムの街いばらの体制づくり、ここ井原はデニムの街であるということを来街者に自信を持ってPRできる受け入れ体制の構築。

第3班：「日本三選星名所」の一つである美星町の“星”を活かした仕事作り、井原の豊かな環境資源（例えば水）を守り育てるまちづくり。

第4班：高校生が自宅から安心して通学できるスクールバスの導入（コミュニティバスの充実）、井原市が生んだ新体操界の社会人脈を活かして、ジュニアの養成に力を入れる、スポーツ振興によるまちづくり。

第5班：自然環境や気候風土の良さを引き出し、例えば自給自足をテーマにした「青空市」を開催する（身近に出来ることから始めよう）、子育て世代が安心して生活できるように、おじいちゃんやおばあちゃんのパワーをもっと引き出し、例えば廃校舎を活用したフリーマーケットを開催して、その収益を保育料に廻して、無料化を図るなど、市民参加で子育て世代を応援するシステムを構築する。

こうして、第2回戦略会議のワークショップは終了しました。阿部典子副会長（みんなの集落研究所首席研究員）のコメント、前田芳男会長の講評とコメント、そして筆者がアドバイスを述べ、最後に川井眞治副会長（井原商工会議所会頭）の挨拶で会議は終了しました。全員が笑顔で生き活きた議論を交わされ、非常に充実した内容の会議となりました。この内容をまとめて次に展開する流れを、事務局で協議することになりました。



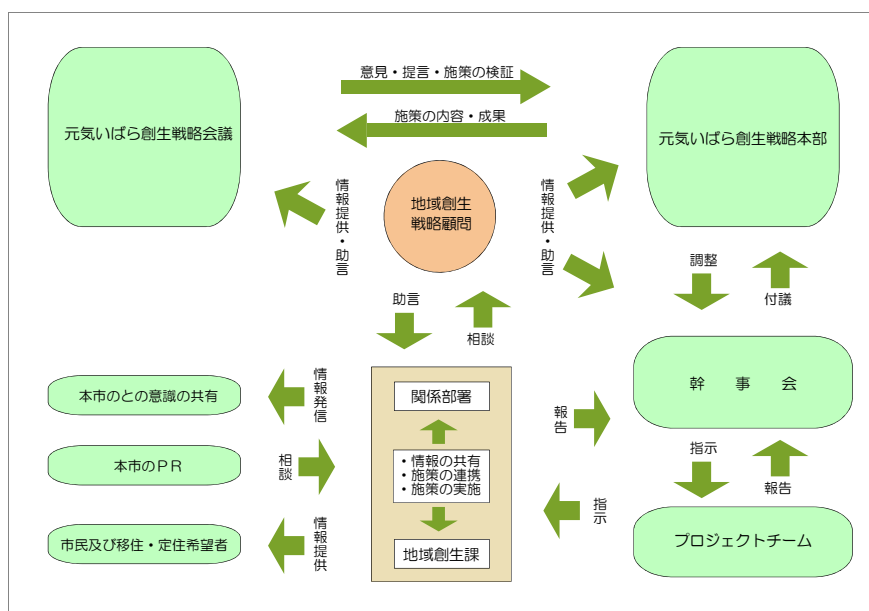
奥中央が前田芳男会長

また創生戦略本部では、幅広く市民の声を地方創生戦略に取り入れるべく、いくつかのアンケート調査を行いました。例えば「井原市人口の将来展望に関するアンケート調査」は下記のとおりです。

- ① 調査対象：市内在住の18～39歳 1,000人、調査期間：平成27年8月3日～17日、調査方法：郵送による、有効回収数：304、有効回収率：30.4%
- ② 調査対象：四季が丘団地住民の世帯主 18～39歳 58人、調査期間：平成27年8月31日～9月9日、調査方法：郵送による、有効回収数：21、有効回収率：36.2%
- ③ 調査対象：市内在住の高校生 404人、調査期間：平成27年9月1日～平成27年9月11日、調査方法：高校へ持参、有効回収数：364、有効回収率：90.1%
- ④ 調査対象：市内企業 37社、調査期間：平成27年8月28日～9月14日、調査方法：郵送による、有効回収数：27、有効回収率：73.0%

このほか、井原市以外の人たちからも、「井原市まち・ひと・しごと創生総合戦略に関するアンケート調査」によって、意見や考えを聴取しました。調査対象は、東京で開かれた「大田原市（栃木県）・井原市友好親善都市盟約30周年記念事業 in スカイツリー」への来場者300人で、平成27年9月27日に東京スカイツリータウンで実施し、来場者への配布調査（有効回収数300）の形で行いました。さらに、「転入者、転出者へのアンケート調査」では、井原市への転入・転出者を調査対象とし、平成26年度に、井原市市民課窓口での配布調査（有効回収数301）として実施しました。

ここで、参考までに総合戦略策定に向けた組織・体制について井原市の資料を下記に示します。中央の「地域創生戦略顧問」が筆者です。



元氣いばら創生戦略推進体制（井原市資料より）

(2)「元気いばら創生戦略本部」の活動

さて、市長を議長とする「元気いばら創生戦略本部会議」も回を重ねました。8月21日には第4回同会議が開催され、市長の進行で、この間の元気いばら創生戦略会議での成果報告や、地域活動の予定や進捗状況報告、施策の検討がなされ、当面の重点方針が決められました。①美星天文台を活用した若者の呼び込み、②ゆるキャラ活用による「姉妹都市」との共催イベント、③地域おこし協力隊員の募集、④指定管理事業の審査、⑤井原市立井原中学校の建替え計画など、取組むべき議案が井原市幹部により検討されました。

戦略本部が抽出した上記の課題点のうち、地域創生に関係のある地域の活動や平成27年度に地域創生戦略顧問として関係した事案を報告いたします。

ア. 美星天文台を活用した若者の呼び込み

① 七夕夜市

美星天文台のある井原市美星町は、あるテレビ番組が企画した“天文学者が選ぶ星空がきれいな場所”に、沖縄県石垣島（石垣島天文台）、長野県野辺山高原（野辺山宇宙電波観測所）と並んで選定され、以来、「日本三選星名所」として知られるようになりました。7月11日、美しい星座を眺めながらのイベントで日頃の疲れを癒やしてもらえよう、地域の皆さんたちが創意工夫を凝らした企画で来場者をおもてなしいたしました。



② 2015 BISEI SORA（空）SORA（宙）GIRLS MEETING

11月14日、美星町で「美星空宙ガールズミーティング」が開催されました。あいにく雨のため会場が「中世夢が原」から美星中学校に変更されましたが、駐車場は大勢の女性たちや家族づれで一杯、シャトルバス乗り場は長蛇の列となりました。

受付を済ませて会場を巡ります。天体望遠鏡体験コーナー、天体に関する体験コーナーやグッズ売り場、趣向を凝らしたグルメ販売など、女性を意識したセンスの良い企画で会場は活気にあふれていました。井原市発、全国で人気急上昇中の「歩いているのに、走っていた。」がキャッチフレーズの、国際自動車部品メーカー片山工業製「ウォーキングバイシクル」に試乗させて頂きました。電動アシスト付で変速機を装備しています。井原市のまちづくりに一役買って頂きたいと夢が膨らみました。

また、岡山市西川緑道公園で定期開催される「有機マーケット いち」の主催者と、井原市に隣接する総社市の有機農家「陽（ひ）のまる屋」さんが、共同でジビエ料理のお店を出しており、戦略会議で副会長を務める NPO 法人みんなの集落研究所の阿部典子首席研究員が企画・販売を担当していました。イノシシのソーセージとスープを頂戴しました。絶品でした。



NPO みんなの集落研究所 阿部典子首席研究員と（写真左）

メイン会場の体育館では、音楽イベントが開催されて、瀬戸内市牛窓など岡山県内で活躍する Marco さんのステージが人気を集めました。素晴らしい歌声に合わせて即興で絵画が描かれ、美星のステージから美声が、澄み渡る空へ、宇宙へ届きました。裏方には、井原市で地方創生を担当している皆さんの顔も揃っていました。



地方創生の観点からは、こうした企画への参加をきっかけに、いかに美星町に興味を持っていたか、移住・定住に結び付けていくかが大きな課題です。

イ. ゆるキャラ活用による「姉妹都市」との共催イベント

① ゆるキャラ活用

8月17日は、戦略会議に出席したあと、全国ゆるキャラグランプリがスタートしたことを受け、井原市の「でんちゅうくん」と一緒に、筆者も井原駅前市民の皆さんにグランプリへの投票を呼びかけ、応援を宜しくお願い申し上げました。この活動は、井原市名誉市民である平櫛田中（ひらくしでんちゅう）先生の代表作「鏡獅子」をモデルにした井原市のマスコット・キャラクター「でんちゅうくん」が、井原市営業部長として支える広報活動です。この日は、でんちゅうくんの熱烈なファンが広島県呉市から訪れ、田中（でんちゅう）美術館を鑑賞された際に、多くのでんちゅうくんグッズをお買い上げ頂きました。そのお二人を地域創生課へお招きして、職員一同でお迎えしました。営業部長でんちゅうくんの活躍に、井原市民が大きな期待を寄せています。でんちゅうくんの人気は急上昇中のようです。



井原駅前でPRする井原市営業部長、でんちゅうくん

② 姉妹都市との共催イベント

井原市は、源平合戦で有名な那須与一と縁が深く、与一が取り持つ縁で、栃木県大田原市とは友好親善都市となっています。その盟約30周年を祝して「東京スカイツリータウンイベント」が開催されました。

9月27日、関係者は早朝から東京スカイツリー1Fソラマチひろば（屋外会場）に集合、7時から会場準備を開始しました。井原市職員や関係者の皆さんは、てきぱきと設営に入ります。11時から、井原・大田原両市の市長によるオープニングセレモニーで幕が上がりました。そのあと、特設会場では、「氏神（うじがみ）一番ステージ」としてロックバンド「氏神一番」（「でんちゅうくん音頭」の制作者、氏神さんのバンド）が歌を3曲披露、次に、「ふるさと大使ステージ」として、岡山出身のよしもと芸人、「千鳥」と「ブロードキャスト」が登場、会場を盛り上げました。そして、「ご当地キャラステージ」として、井原市のでんちゅうくんと、大田原市の「与一くん」のステージ、大田原市に縁の深いシンガーソングライター横田悠二さんのミニライブ、さらに、両市のクイズを出すゲーム大会と続き、16時に閉会しました。



舞台中央が瀧本豊文市長（写真左）

会場には、観光PR・移住定住関係ブース、デニム販売・加工体験ブース、ぶどう試食・販売ブースが設けられました。ご来場の皆さんには、井原産葡萄「ピオーネ」を試食して頂きました。また筆者は、井原市の皆さんと共に、来場者向けにU・I・Jターンに関するアンケートの実施を担当いたしました。約300人の方から回答を頂くことができました。

た。回答者の中から、くじで当選された方に葡萄一房をプレゼントさせていただきました。アンケートは、後日、岡山大学地域総合研究センターにて集計・分析いたしました。

また、東京ソラマチ内の「スペース 634」という別の会場では、井原市が生んだ偉大な彫刻家、平櫛田中を記念する平櫛田中賞の受賞者で、東京スカイツリーのデザインを監修した澄川喜一先生の講演がありました。さらに、サッポロビールの前身「大日本麦酒」の社長を務め、「日本のビール王」と呼ばれた井原市出身の実業家・馬越恭平（1844～1933年）について、エビスビール記念館の端田晶館長が、馬越の生い立ちから成功までの偉業、人となりについて講演されました。興味深いお話に、会場からは盛大な拍手が送られました。関係者の皆様、そして、でんちゅうくん、ご苦労様でした。



ソラマチひろばでのイベントやアンケート実施風景（写真左：妹尾光朗 地域創生課長）

ウ. 地域おこし協力隊員の募集

地方創生に取り組む自治体では、新しい視点や発想力を取り入れることで、埋もれている資源の発見や見直しを行い、地域の潜在能力を引き出して地域の活性化を図るべく、地域社会の新たな担い手として、「地域おこし協力隊」の募集を進めています。岡山県下においても、制度創設以来、既に多くの自治体で協力隊の皆さんが活躍しています。例えば、岡山大学のまちづくり学生サークルは、瀬戸内市において、協力隊の方のご指導で、空き家の再生活動を進めています。また、新見市では、森林ボランティア活動に参加した経験をきっかけに、岡山大学法学部出身の卒業生が、県外大手企業の内定を断って協力隊に入り、地域のために活動しています。

井原市でも、建設経済部地域創生課が窓口となって、「地域おこし協力隊」の募集を開始しました（平成 28 年 4 月 1 日現在 3 名を採用・配置済み）。東京にある岡山・鳥取両県のアンテナショップ「とっとり・おかやま新橋館」や大阪での、地方創生戦略本部主催の説明会への出足は好調で、協力隊に関心のある多くの方にご参加頂きました。隊員の委嘱期間は 1 年で、活動の姿勢や成果を勘案の上、最長 3 年まで更新が可能です。報酬等は最大年間 409 万 2 千円です。市との直接の雇用関係はありませんが、活動に支障の無い範囲で就業等が可能ですし、住居等も市が斡旋するなど、委託期間終了後も将来にわたって就業して頂くことが期待されています。



井原市地場産業振興センター

採用面接が行われた 8 月 25 日、台風接近のため、井原市は暴風雨となりました。面接が実施できるか心配されましたが、交通機関への影響で少し遅れた方や、井原駅から会場までの道で雨に打たれ、ずぶ濡れでお見えになられた方がおられて、気をもむ事態もあったものの、何とか無事に開催することができました。社会で様々な経験をお持ちの方に、千葉、福岡、大阪、奈良、滋賀、広島など遠くから応募いただきました。面接・審査にあたられた地域代表の皆様に、心から感謝いたします。

エ. 指定管理者選定委員会

10 月 16 日の朝から、井原市指定管理者選定委員会が開かれました。指定管理者の実際の選定プロセスに関与させて頂いたのは、筆者にとっては初めての経験です。雇用の創出や民間活力の導入、単なる補助金ではなく投資としての税の投入になっているか、地方創生の事業に資することが出来るか、課題は多くあると感じましたが、指定管理者候補の皆さんからは、創意工夫や熱意が伝わり、指定管理制度の実態についても学ばせて頂きました。

終了後は地方創生戦略本部へ移動して、今後の戦略策定への手順について打ち合わせを行いました。



井原市役所

オ. 井原市立井原中学校の建替え

井原市立井原中学校の建替えに関する、設計コンペの審査を担当させて頂きました。井原市の核となる中学校の建替えにより、地域を愛する健全な子供たちの育成が地域ぐるみで実現できれば、との思いを強くしました。コンパクトシティの中核を担う中学校を目指します。ソフト施策とハード施策、学校と地域とがうまく組み合わさって、地域社会が持続的に発展することを祈念しました。



井原市立井原中学校

4. 井原市若手職員による地方創生

井原市へ地域創生戦略顧問として平成 27 年 4 月 1 日より派遣されて以来、「元氣いばらまち・ひと・しごと創生 人口ビジョン」、「元氣いばらまち・ひと・しごと創生総合戦略」の策定作業を支援して参りました。その一環として、井原市若手職員向けの研修会を開催して、若い人々のアイデアを地域の創生に活かす取組みを展開しました。

(1) 第 1 回研修会

この研修会は、筆者の提案により、瀧本市長の肝いりで、井原市の若い職員のパワーを地方創生に活かすことを目的に始められたものです。平成 27 年 10 月 20 日（火曜日）、公募で集まった 10 名を超える井原市職員が、部局を超えて参加してくれました。

午後 1 時 30 分から開始、まず、日本社会や経済の置かれた状況について、さらに地方における少子高齢化や財源の問題、国が進める地方創生の考え方や取組みについて、筆者が話題提供をいたしました。また、現在の行政システムのメリットやデメリット、今後の自治体職員の果たすべき役割について問題提起をさせて頂きました。休憩をはさみながら、井原市の強み・弱み、機会・脅威の抽出と分析（いわゆる SWOT 分析）を、3 チームに分かれてお願いし、チームごとに発表して頂きました。

井原のまちの良さについては、自然が多い（星がきれいに見える、自然に恵まれた、山が多い、田舎）、安心（落ち着く、暮らしに安心感がある、住みよいまち、気が合えば暮らしやすい）、安全（災害が少ない）であり、弱みとしては、活気がない（人が集まらない、若者が少ない）、気質が保守的（外の人に厳しい、気が合わない人は大変）、遊び場がない、交通の便が悪い（電車、バスの本数が少ない）、大学がない（高校を卒業すると、大半が出て行く）、イノシシ、サル等の獣害被害が多く対策が急務、などの意見が出されました。また、井原市をこんなまちにしたいという話し合いでは、子供に関しては、近隣他市町に比べて圧倒的な定住対策を展開すること、子育て世代が住みやすく子供がいっぱいて元気に育つまちにすること、また、若者に関しては、若い人が住みたいと思うまち、高卒で働きやすいまちにしたい、との意見が出ました。地域おこし協力隊の方にもご参加いただきました。

まとめとして、「保守的な人の心を解き放ち、近隣他市町より圧倒的な定住を促進し、若者が輝くまち」にしたい、「観光地として人にいっぱい来てもらい、衣食住すべてが市内で賄え、一生住み続けられるまち」にしたい、「星」で婚活、若者主役、子育てしやすいまちにしたい、といった考えや目標が示されました。

夕方、パンと飲み物の差し入れを頂き、一息ついてから、井原市をいま以上に元気なまちにするためにどうすればよいか、具体的なシナリオを描く作業に着手しました。各チームで積極的な議論が続き、夜 9 時過ぎに打ち切って、次回に継続となりました。

(2) 第 2 回研修会

10 月 26 日（月曜日）、第 2 回研修会が開催されました。井原市地方創生戦略構築に向けて、若手職員の皆さんはグループワークにより戦略プラン作りを開始です。①産業振興、②コンパクトシティ、③小さな拠点、の 3 テーマでグループに分かれ、前述の、市民や高校生、企業、県外の方、それぞれの声をお聴きしたアンケート結果を読み込み、RESAS デー



井原市若手職員が創生戦略を考える（写真左は地域おこし協力隊山脇節史さん）

タを活用し、産学官金労言代表の外部識者意見を反映し、中枢都市圏連携、地域おこし協力隊の参加といった要素を盛り込んで、グループごとにシナリオを描いて頂きました。また、地域おこし協力隊の山脇節史さんにもご参加頂き、自らの戦略シナリオをプレゼンテーションして頂きました。翌週に第3回を開催する前の週末に、市長はじめ市の全部長の前で各チーム15分間の持ち時間で提案して頂きます。その結果を産学官金労言代表にも伝えて意見やアドバイスを頂き、最終的に、地方創生本部が策定中の正式な地方創生総合戦略に取り入れて、12月の市議会へ諮ることとなりました。

地方創生で大切なことのひとつが、自治体職員の意識改革です。井原市の将来を担う若手職員の意識改革と協働参画マインドの醸成が、研修会の真の目的・狙いです。人口は5万人を切り、消滅さえ危惧される自治体ですが、自治体の「やる気スイッチ」をオンに入れ、部局を超えて若手職員が地方創生戦略策定に汗をかいてくれることが期待されます。

(3) 第3回研修会

11月2日(月曜日)、第3回研修会が開かれました。若手職員3チームが土日返上で知恵を絞り、それぞれ創意工夫を凝らした地方創生実行計画を策定・提案して下さいました。どのチームの発表も、大変に創意工夫がなされた具体性の高い内容でした。11月6日に開催される元気いばら創生戦略会議の席で、瀧本市長はじめ幹部の皆様の前でプレゼンテーションする運びです。市長や幹部からご意見を頂き、最終調整を行い、地方創生本部が策定中の創生戦略に反映すべく取組みが進みました。

この日は、リハーサルという位置づけであり、筆者からコメントやアドバイスをさせて頂きました。明るい未来を拓いて頂きたいと願いました。

(4) 第4回研修会(報告会)

11月6日、ここまで進めてきた井原市若手職員による地方創生研修と具体的な創生プラン作りの成果を、元気いばら創生戦略会議の席で、瀧本市長はじめ部長級幹部に対して発表いたしました。テーマは、前に述べたとおり、①産業振興と安心・安全な暮らし、②コンパクトシティ、③小さな拠点の三つです。どのチームも、具体的で見事なプランに仕上げてくれています。

各グループとも、前述の市民・企業・高校生・県外在住者などを対象に実施したアンケートの結果を踏まえ、内閣府が提供する RESAS データの活用など、お願いした課題をきちん



井原市若手職員による地方創生研修と創生プラン作り作業

とこなしてくれていました。市長や幹部からいくつかの質問が出されました。地方創生戦略顧問の立場から総評を述べさせていただき、最後に市長からはねぎらいの言葉がかけられました。若手職員も、自分たちの意見を反映しさせ、こうした経験を将来のまちづくりや行政サービスに活かしていただきたいと思います。

5. 戦略プランの確定に向けた最終の流れ

創生本部の担当者が中心となって、市長や副市長をはじめ各部長から出された意見を最終的に取りまとめ、詳細な内容に関して吟味作業が続けられ、ようやく、井原市の創生戦略案が固まりました。

「元氣いばら創生戦略本部」会議では、市長、副市長はじめ各部長から積極的な意見が出され、戦略本部を中心に、井原市の人口を分析・把握し、将来の見通しを立てながら、国が求める4つのテーマ、すなわち、①井原市における安定した雇用の創出、②井原市への新しい人の流れの創出、③若い世代の結婚・出産・子育ての希望の実現、④安心な暮らしの保全と地域間の連携、のそれぞれについて、必要とされる施策を効果的に実施できるよう、議論が重ねられました。戦略案は、外部からご意見やご提言などをいただく「元氣いばら創生戦略会議」に諮った上で議会へ提出する運びとなりました。それに先立って岡山大学へ持ち帰り、学内で出された意見を踏まえて、最終的な校正作業を行いました。地方創生戦略策定作業は大詰めです。

11月25日、総合戦略の最終案を「元氣いばら創生戦略会議」に諮りました。前田芳男会長の進行で会議が始まりました。事務局から戦略案の詳細な説明がなされ、複数の委員から質疑や意見が出されました。前田会長がそれらを整理し、とりまとめがなされました。副会長をつとめるNPO法人みんなの集落研究所の阿部典子首席研究員から今後に向けたコメントが出されました。最後は、満場一致で戦略案が承認され、同じく副会長である井原商工会議所川井眞治会頭から挨拶があり閉会しました。

これを受けて12月、井原市議会へ戦略案が提出され、「元氣いばら まち・ひと・しごと創生 人口ビジョン」、「元氣いばらまち・ひと・しごと創生総合戦略」は議会で承認されました。議会事務局からの依頼で、平成28年の年明けに、市議会議員の皆様の前で、今後の取り組み計画を含めて、筆者から話題提供させていただくことになりました。

こうして、平成28年1月14日には、平成27年度井原市議会議員研修会に講師としてお招きいただきました。演題は「地方創生について」で、2時間の持ち時間を頂戴し、井原市地域創生戦略顧問の立場からお話をさせていただきました。年頭に当たり、井原市の地域創生の実現と、益々の発展を祈念した次第です。



井原市議会上野安是議長（向かって左端）、西田久志副議長（同・右端）

6. 「元気いばら まち ひと しごとと人口ビジョン」ならびに 「元気いばら まち ひと しごと総合戦略」が正式確定

平成 28 年 2 月 17 日、第 4 回元気いばら創生戦略会議が井原市地場産業振興センター2階で開催されました。前田芳男会長が議長を務め、委員の皆さんから貴重な指摘や意見が出されたのち、満場一致で、念願の「元気いばら まち ひと しごとと人口ビジョン」ならびに「元気いばら まち ひと しごと総合戦略」が承認されました。正式に市民の合意を得たことになります。関係者の皆様に、心からご苦労様と御礼を申し上げます。素晴らしい戦略が策定され、いよいよこれからが本番だと、気持ちを引き締めました。



「元気いばら まち ひと しごとと人口ビジョン」、「元気いばら まち ひと しごと総合戦略」（内容は井原市 HP からご覧になれます）



井原市「元気いばら創生戦略会議」

7. RESAS（リーサス）講座の企画・開催

さて、筆者が井原市の地方創生戦略顧問として派遣されたことを通じて、筆者が所属する岡山大学も教育・研究の側面から、地方創生という大きなテーマへの関わりを深めることができました。内閣府が自治体への情報支援の一環として提供する「地域経済分析システム（RESAS：リーサス）」の操作や活用に関する公開講座の開催も、大学としての支援のひとつです。

現在、井原市を含む全国すべての自治体で、地方創生に向けて、内閣官房（まち・ひと・しごと創生本部事務局）及び内閣府地方創生推進室が提供するリーサスを活用した地方創生戦略プラン作りが進行しています。大学向けにも内閣府によって「出前講座」が開催されており、リーサスの操作方法の説明のみならず、大学生や自治体の方が故郷や自分の住む地域について「楽しみながら」考えるワークショップが各地で開かれています。

こうして、内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局・内閣府地方創生推進室と岡山大学経済学部、同・地域総合研究センターの主催、岡山県の後援の下に、11月16日、岡山大学において RESAS 講座が開催されました。筆者が企画と全体の進行役を担当いたしました。

当日は、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部から、堀 淳一郎ビッグデータ参事官補佐を講師にお招きし、岡山大学創立 50 周年記念館を会場として、「おかやま地域経済分析システム（RESAS：リーサス）講座」と銘打って開催いたしました。岡山県の呼びかけで県内の自治体の担当者が多数参加し、ノート PC を持参した学生と共に RESAS 講座を受講、実際に地域統計データやビッグデータを活用しながら地方創生シナリオを考えました。



RESAS 講座で発表する学生

まず、岡山大学大学院社会文化科学研究科の平野正樹教授（現・経済学部長）が開催挨拶に立ち、堀淳一郎 ビッグデータ参事官補佐が講義を、パソコン指導を中国経済産業省の河野泰紀 地域経済分析システム普及活用支援調査員が担当下さいました。リーサス利用の基本的なメニューと操作方法に始まり、岡山県内の自治体データを紹介しながらの分かりやすい分析事例を次々と披露頂きました。続いて、岡山大学経済学部中村良平教授（大学院社会文化科学研究科教授）のゼミの学生有志が、具体的なデータ分析による地方創生プランについて提案いたしました。それを受けて全員討議を行い、自治体職員や学生から、リーサスや学生提案に対する意見や質問が多数出されました。堀淳一郎講師からも、学生への提案について、アドバイスやお褒めの言葉を頂戴しました。中村良平教授からは、コメンテーターとしての総評を頂きました。筆者からは、日本金融学会でコメントした、リーサスの実践活用に向けた自治体と地域金融機関の連携について話題提供いたしました。最後に、平野正樹教授から結びの言葉を頂きました。

この模様は、NHK の夕方のニュースで取り上げられました。学生たちの提案の様子が紹介され、筆者から企画・運営責任者としてコメントさせて頂きました。この企画を起点として、今後、自治体の皆さんと学生たちが、地方創生について実際のビッグデータを用いながら研究・分析し、具体的提案を策定できるような体制を作って参りたいと考えます。企画にご協力頂きました内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部、内閣府地方創生推進室、中国経済産業局、岡山県、自治体、NHK はじめ関係者の皆様に感謝する次第です。



NHK ニュース（2015 年 11 月 16 日）

8. 地方創生人材支援制度の活動報告会

平成 28 年 3 月 23 日、霞ヶ関の合同庁舎 4 号館で、地方創生人材支援制度の活動報告会が開催されました。第 1 期生に続き、この春から第 2 期生が全国に送られることになり、その初顔合わせを兼ねた会でもありました。

岡山県へは、井原市に加え、新たに備前市（派遣元は文部科学省）と真庭市（派遣元は総務省）にも派遣されます。報告会終了後、会場を半蔵門にあるホテルに移して懇親会が開かれました。派遣者の地元から日本酒など名物の品が持ち込まれ、地域の創生活動について、苦労話や成功事例など、活動の様子が話し合われ、大盛況となりました。岡山県に派遣されている全員で、連携を深めながら汗をかいて参ることを誓い合いました。

また、恒例の石破茂地方創生大臣の挨拶があり、ブロックごとに大臣を囲んで記念撮影がありました。



活動報告会の模様（写真左）と、中国地区担当者による石破茂地方創生大臣との集合写真

9. 岡山県派遣の第 1 期生が情報交換

地方創生政策では、「東京一極集中」阻止が掲げられています。しかし、その一方で、県単位で見れば、県庁所在地（そうでない県もありますが）への一局集中も懸念されています。つまり、日本全体で見ればマクロ、地域で見ればミクロの政策が必要となり、全体の整合をいかにとるべきか、全貌が見えれば見えるほど、大きな壁が立ちはだかります。

平成 28 年 4 月 22 日、岡山県下の人口 5 万人以下の自治体に国から派遣された、地方創生人材派遣制度の第 1 期生全員が、岡山市西川沿いに市と岡山大学が開設した市民のための地域の拠点「西川アゴラ」に集合いたしました。派遣先と派遣者の所属は、美作市：経済産業省、和気町：財務省、赤磐市：農林水産省、瀬戸内市：国土交通省、井原市：岡山大学地域総合研究センター（筆者）です。第 2 期生（備前市：総務省、真庭市：文部科学省）の歓迎会も企画しましたが、着任早々であり、お招きできませんでした。

午後 3 時から 6 時まで意見交換・報告会を開催し、本音で話し合うことができ、非常に有意義な会となりました。地方創生を任務とする者同士、このように情報を共有し知恵を出

し合いながら、力の及ぶ限り、地域の課題解決を支援していこうと決意を新たにいたしました。



西川アゴラでの情報交換。写真左上は西川の水辺の風景。



閑話休題。平成 27 年 11 月 19 日、井原市はぼかぼか陽気でした。地方創生戦略会議まで少し時間がありましたので、いつもお世話になっている山陽新聞さんの井原支局を覗いてみました。職場と住居が一体となった立派な造りです。

10. 井原市における岡山県の企画への岡山大学の協力

筆者の所属する岡山大学地域総合研究センターは、世界に目を向けつつ地域に開かれた大学、地域と共に発展する大学を目指して、平成 23 年に設立された全学センターであり、地元自治体とのさまざまな連携を進めています。大学が自治体の要請を受けてどのように連携活動を行うのか、その一例をご紹介します。

平成 27 年夏、岡山県備中県民局から、井原市にある公共の宿泊・研修施設「高原荘（こうげんそう）」（井原市芳井町上鳴 1525）を利用して地域づくりを考える事業に大学生を参加させてほしいとのご案内がありました。筆者が井原市の地方創生を担当していることもあり、7 月 31 日、三木良一センター長補佐（現・山陽新聞社備前支局長）と共に現地視察に参りました。

高原荘のある高原（たかわら）地域は、その名が示す通り、急峻な深い山中に入った高原にあって、完全に限界集落化している地域だと感じました。また、妙福寺という日蓮宗の古刹（眼下に見下ろす眺望は落差があり絶景）や、JFE スチールの関連会社が製鉄に使う石灰岩を砕石する現場があるため、それらの場所を訪れて歴史や地場産業を学び、地元住民の皆さんとの座談会や交流会を実施した後に、学生が地域の魅力を発信するプランを

立案する、といった形で一泊二日のプログラムが予定されているのだろう、と推察しました⁶。

確かに、学生たちが限界集落の実情を知る上では、よい学びや体験ができるかも知れま



高原荘と周辺の景観

せんが、課題解決を図るという観点からは、かなり難易度の高い企画であると感じ、まずは岡山県が具体的にどのような展開を想定されているのか、問い合わせてみようという結論に達しました。それにしてもその日は猛暑で、屋外活動では水分補給を欠かせなかったことも留意点の一つでした。

ここで、学生の地域参加について所感を述べさせていただきます。消滅可能性都市の存在が明らかになり、地方創生が叫ばれる中で、これまで述べたように、国から自治体に対して地方創生戦略案の策定・提出が予算付きで呼びかけられています。これを受けた自治体は、地元の大学に協力を依頼することが多くなります。岡山大学にも、県内の多くの自治体から協力の依頼が来ています。調査研究分野でのご協力については、可能な限り対応させて頂くべく、最善を尽くしているところです。また、学生の参加についてもご依頼が増えました。こうした機会に、学生たちに地域社会の実情を現場で学んでもらうことは、とても大切な事であると考えています。そこで、学生の参加や派遣についてご依頼を受けた際、教員の立場からは、その目的やねらいが何か、また、学生たちはそこから何を学びとることが出来るかを考えます。

次に、例えば、地域の皆さんとのワークショップを想定しますと、直面している地域課題の解決策を見出すことが相当に困難な場合、単なる無責任なアイデア出しで終わってしまう危険性を心配します。そうすると、地域の皆さんにかえって失望感や挫折感を残してしまう結果となりかねないためです。これまでも、学生たちが岡山県内の地域へ関わりを持たせて頂いて、喜ばれた例もあれば、逆にご迷惑をおかけした例もたくさんあります。（指導不足であると反省しています。）また、無責任なアイデア出しで終わった場合、学生にとっ

⁶ “高原（たかわら）地域は、高原と日南にまたがる石灰岩台地で、吉備高原特有の自然景観を形成しています。台地東端の八幡神社の社叢には、アベマキ、ケヤキなどの大木が茂り、ツリバナ、クマノミズキなどの高地性植物も見られます。台地西端の妙福寺の裏庭には、カレンフェルトが存在して昔の高原台の面影を残しています。裏庭とそれに続く山林には、樹齢 250 年のエノキ、樹齢 300 年のシラカシや好石灰岩性植物などが生育しています。また、周辺にはベニモンカラスジミなど貴重な昆虫や、タワラガイ、オオケマイマイなど陸性巻貝が多数種確認されており、のどかな田園風景と貴重な動植物に恵まれた地域です。”（出所：井原市ホームページ）

でも真の学びは得られません。そして、最も気を配るのが、現地へ行く際に発生する怪我などのリスクです。主催者から、現地への移動方法についてきちんとした説明もないまま、「旅費宿泊費は支給しますが、現地へは自己責任で来てください」などといった条件が示されずと、困り果ててしまいます。いっさい公共交通手段が無く、徒歩で行くのは論外、道が険しくて自転車では危険すぎ、自動車で行くにも街灯がなくて夜道は真っ暗、地元民しか通らないといった、都市部と比べるとまことに厳しい環境に置かれている集落でこうした企画が立てられたならば、大学としては、教員が事前調査をして安全が確保できるか確認のうえで、教職員自ら自動車を運転して、学生を同乗させるしか方法はありません。そうした困難な条件を学生自らが解決することも学びかもしれませんが、その場合は、主催者がある程度の答えを用意していなければならないと考えます。

つまり、企画自体に疑問を呈してしまいます。少なくとも、「最寄り駅に何時何分集合、そこからは用意したバスで・・・」という企画にして頂きたいと思いますし、参加希望者へは、当該自治体や集落に関する基礎資料や、課題に関する資料提供など、事前学習の素材は提示して頂きたいと思います。自治体関係者の皆さまには、「地方創生予算がついたから、何かする」というような受け身の姿勢ではなく、学生のために積極的に学びの場を創り出す、という気概をもってご指導いただければ、と考えます。結果的に、高原荘の事業には岡山大学からも複数の学生が参加し、幸いなことに事故もなく盛況のうちに終了いたしました。



井原市高原地域にある妙福寺の風景

写真右：現地視察を終えて立ち寄った、井原市芳井町共和（よしちようきょうわ）の三村珈琲店。昔の郵便局を改装した雰囲気のある喫茶店で、丁寧に煎れて下さる上質のコーヒーは絶品でした。何人かのコーヒー通の知人に勧められて行きました。店内は撮影禁止とのことでした。



12. 井原市の魅力紹介

さて、地方創生の観点から改めて見直すと、井原市は実にさまざまな魅力ある資源に恵まれた地域であることが分かります。ここからは少し井原市の魅力をご紹介します。

(1) 井原市立 田中（でんちゅう）美術館

井原市が生んだ著名人は数多くいますが、なかでも、近代日本美術界を代表する彫刻家、平櫛田中（ひらくしでんちゅう）⁷ は有名です。代表作の、六代目尾上菊五郎をモデルとした「鏡獅子」は東京の国立劇場ロビーに飾られています。田中美術館にあるその試作の数々や、隣接する公園、田中苑に置かれたブロンズ作品もまことに力強く、活き活きとした躍動感に溢れています。一方で、「幼児狗張子」は、生きた赤子が今にもこちらに手を差し伸べて「はいはい」してくるような錯覚に襲われるほどリアルな作品です。また「尋牛（じんぎゅう）」を見れば、中国唐代の漢詩に出てくる仙人を思い浮かべました。書も魅力的で、107歳という長寿であった田中の作品は、素人の眼にも味わい深く、感動を与えてくれます。

また田中美術館では、彼の作品を展示する常設展に加えて、趣向を凝らしたさまざまな企



田中美術館と、隣接の田中苑（でんちゅうえん）など。

画展が開催されています。例えば、平成27年の4月27日～5月31日には、「平家物語を描く」が開催されていました。さらに、美術館のそばには、「中国地方の子守唄」の歌碑があります。地元の声楽家、上野耐之が、古い子守歌を採譜し、それを山田耕筰が編曲して、わが国はもとより世界に認められた名曲となりました。また、田中苑には透明な清流名水が滾々と湧き、井原市が水の都であることを象徴しています。市役所の話では、喝水したことはないとのこと。

筆者が初めて田中美術館を訪れた時、庭園のツツジが見過ろを迎えており、「五代目尾上菊五郎」ブロンズ像の背景に



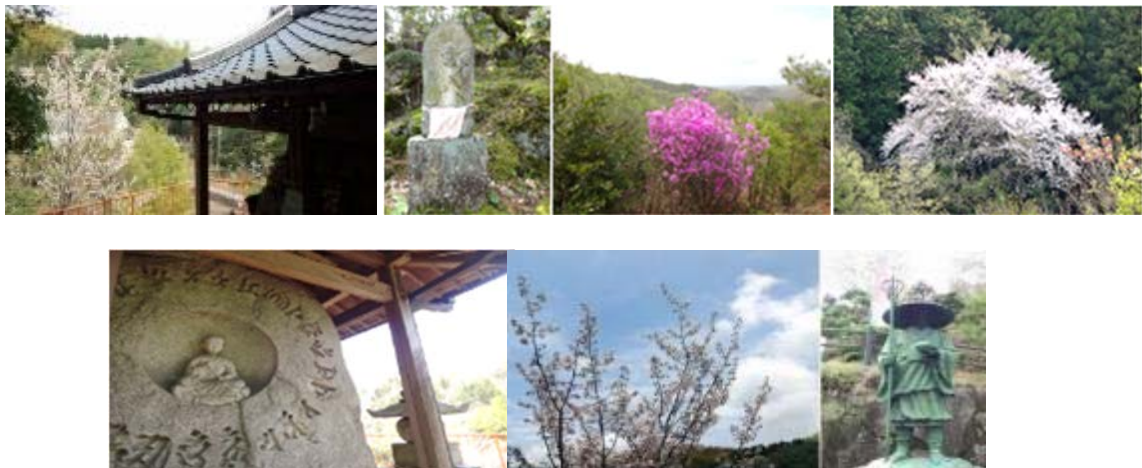
⁷ “平櫛田中（1872～1979）は岡山県井原市に生まれた、近代日本を代表する彫刻家です。本名を倬太郎（たくとろう）と言い、田中家から平櫛家に養子に入ったのち、田中（でんちゅう）と号しました。107歳でその生涯を閉じるまで、明治・大正・昭和の三代に渡って活躍しました。岡倉天心と西山禾山に思想的な影響を受け、伝統的な木彫技術と西洋の彫塑を学んだ田中の作品は、観る者を引き込む緊張感と、人間味あふれる豊かな創造性を持っています。なかでも井原地方の古い伝承に基づく《転生》（東京芸術大学大学美術館蔵）や、六代目尾上菊五郎をモデルに約20年の歳月をかけて完成した《鏡獅子》（東京国立近代美術館蔵、国立劇場展観）は、こんにち平櫛田中の代表作として知られています。”（田中美術館ホームページより。）

立つ二本の大木は白い花で満開でした。また、エビネの展覧会が開催中で、丹精に育てられた作品にしばし見とれました。そして、地元の名門私学、興譲館（こうじょうかん）高等学校吹奏楽部による定期演奏会が始まろうとしていました。受付や駐車場の案内係をする高校生たちは礼儀正しく、礼節を重んじる校風がうかがえました。

(2) 嫁いらず観音院

井原市の中心市街地のほど近くに、約 1200 年前の天平 9 年、奈良時代の名僧、行基によって開基されたとされる通称「嫁いらず観音院」があります。観音院から眺める景色は素朴で、小高い山を周回する参道のあちらこちらに野仏が置かれ、山の斜面ではツツジや山桜が春風に吹かれ、心地よい山里の時間がゆっくりと過ぎてゆきます。

長年東京や名古屋で勤務した身にとって、こうした感覚は、大都会の生活ではなかなか味わうことができなかったものです。「年老いた人たちが、嫁の手を煩わすことなく健康で幸福な生涯を全うできる霊験あらたかな観音様」として知られる嫁いらず観音院。歳を重ねてくると、そのような時間の過ごし方に人生の価値があるのかもしれないと思うようになります。改めてそんな思いを起こさせる場所です。



嫁いらず観音院

(3) 井原デニム

さて、井原市の特産品といえば、倉敷・児島と並ぶ「井原デニム」です。昔ながらの織機を使った生地には人気があり、世界の高級ブランドに買い付けられて人気を博しています⁸。井原デニムのブランド名は「D#」（ディーシャープと読む。デニムの D、# は井原市の“井”を表すとともにワンランク上を示すシンボル）です。井原駅構内にショップがあり、また、

⁸ “昔ながらの織機で織られたセルビッチデニムは世界中の有名ブランドの製品にも使用されている最高級品。D# THE STORE は、井原駅構内にある「井原被服協同組合」による井原産デニムのお店です。ショップには、組合加盟各社の井原産ジーンズやショップオリジナルの小物類が並ぶ。また、店舗にはオープンスタイルの作業スペースもあり、生地・縫製仕様など細部にこだわったお客様オリジナルのジーンズの作成も可能。”（D# THE STORE ホームページより）

井原市地場産業振興センターには、岡山市にある専門学校、岡山ビジネスカレッジの生徒たちが制作したデニム作品が展示されています。

このような、伝統産業を起点として新しいアイデアを盛り込んだ斬新な地域創生モデルが、次々と生み出されることを切望します。



「D#」(ディーシャープ)と専門学校の生のデニム作品

(4) 明治ごんぼう村市場

井原市特産の食材に牛蒡(ごんぼう)があります。地域の言葉で「ごんぼう」と呼ばれ、井原市明治地区で多く栽培されることから「明治ごんぼう」という名前がついています。井原市芳井町種(たね)にある「明治ごんぼう村市場」⁹を視察しました。お腰の曲がったお婆さんが一人で店番をされていました。そこへ「今日は格別に暑いので、ようやく持って来れたわ」と、収穫されたばかりの青々とした枝豆を手押し車に積んだ別のお婆さんが来られました。やっぱりお腰が曲がっておられました。



牛蒡畑と明治ごんぼう市場

今年のごんぼうの出来具合や世間話をさせて頂きました。「いつまでもお元気で」と申し上げましたら、「あなたもね」と笑顔を返して下さいました。明治ごんぼう村市場で

⁹ “「明治ごんぼう」の産地として知られる明治地区は、井原市芳井町の北東部、標高 400 メートルの高原地帯にあります。明治地区の土壌は粒子の細かい赤土で、手で握るとぎゅっと固まるような粘土質が特徴です。そのため「明治ごんぼう」は味と香りがよく、また肉質が緻密なことから歯切れも良いため、市内外を問わず多くのお客様にご好評いただいております。少ししなびてきたら水につけると復活するぐらい日持ちも良く、ご家庭での料理に使いやすい食材です。また、ゴボウ以外にも明治の高原で採れた新鮮な野菜や加工食品も販売しております。一年を通じて、その時期ならではの旬の野菜をお安くお買い求めいただけるほか、「ゆずみそ」「手作りこんにやく」などの期間限定商品もおすすです。”(井原市ホームページより)

は、朝取りのキュウリ 6 本、ナス 4 本、ズッキーニ 1 本（それぞれ 100 円）、フルーティートマトと枝豆（それぞれ 120 円）、ごんぼうかりんとう（350 円）、ごんぼう酢漬（300 円）を購入しました。帰宅後、さっそくサラダや炒め物にして頂きました。

さて、その牛蒡を使ったご当地ラーメンがあります。「いばラーメン」と命名されたラーメンは、井原駅構内の「加門（かもん）」で食べることができます。一杯 500 円のワンコインが嬉しく、懐かしい味わいの一杯です。井原市は水の美しさでも有名で、この清流を使ったラーメンはじめ加工品の味も保証つきです。井原市役所傍の田中苑に引かれた清水は透明です。



写真左：田中苑の清流 写真右：いばラーメン

13. 岡山大学天文部学生による井原市美星町の視察

井原市の魅力ある場所の一つとしてご紹介した美星天文台に、平成 28 年 3 月 28 日～29 日、岡山大学天文部の学生たちを連れて視察に参りました。井原市への地域創生支援活動の一環として、岡山大学の学生たちの知恵やアイデアを地方創生に活かすことが目的です。前述したように、岡山県井原市美星町は、沖縄県石垣島、長野県南牧村と並び、天文学者が選ぶ「日本で一番綺麗な星空ベスト 3」として知られています。天文愛好家の学生たちは、28 日午後 1 時に大学本部棟前に集合し、引率役の筆者と渡部英広主任（岡山大学事務職員）が運転する公用車 2 台に分乗して出発しました。一行がまず訪れたのは、美星町「星の郷（ほしのさと）青空市」です。

(1)「星の郷青空市」市場

井原市美星町西水砂（にしみずすな）にある「星の郷青空市」市場には、美星町内の生産者が、収穫したばかりの新鮮な野菜を並べています。ほとんどの品物が市価よりかなり安く、市内だけでなく近隣の市町村からも訪れる人で賑わっています。



徳山牧場アイスをいただく岡山大学天文部の学生たち（写真右）

地元の産直野菜に並んで、シーズンには、名産の「白桃」が数多く売られます。また、特産品「美星豚」を使った「美星バーガー」が名物です。野菜と豚肉、玉葱を炒めたつなぎの旨みが絶品で、何とか販路を拡大したいものです（右下の写真）。

学生たちは、市場内にある「徳山牧場アイス工房」で、地元の原材料で作られた上質のジェラートを味わいました。徳山牧場から直送された、濃厚な味わいの新鮮な牛乳を使ったジェラートです。その後、産直野菜や美星豚など地元の産物を見学しているところへ、井原市「元気いばら創生戦略本部」の方々が出迎えに来て下さいました。



(2) 井原市美星支所

次に向かったのは、井原市美星支所（旧美星町¹⁰役場）です。星の五角形を模った瀟洒なデザインの庁舎で職員の皆様にご挨拶した後、支所内を見学させて頂き、記念写真を撮らせていただきました。



(3) 星の郷ふれあいセンター

井原市美星支所（旧美星町役場）

そして、近所の生協で夕食と朝食を買い込み、宿泊先の「星の郷ふれあいセンター」へチェックイン、荷物を部屋へ搬入しました。パンフレットに紹介されているとおり、星の郷ふれあいセンターは、元高校だった建物を改築した研修施設で、周囲を緑に囲まれた高原の宿舎です。宿泊室（和室）には 100 人程度の宿泊が可能で、周辺には美星天文台や中世夢が原、プールやテニスコート（4 面）もあり、各種団

10 “井原市美星町では、空気中のちり、ほこりなどが、人工の光を散乱、反射する散乱光によって夜空が明るくなり、星が見えにくくなること（光害）を防ぐため、「美しい星空を守る美星町光害防止条例」を全国に先がけ平成元年に制定し、地球環境とその美しい星空を守っています。”（岡山県ホームページより）

体やサークルの合宿や研修に適しています。風呂やトイレも清潔で、子供から大学生、社会人でも若い層が利用するには十分な設備を備えた施設だと感じました。



旧高校の建物を利用した「星の郷ふれあいセンター」

管理人さんから、開設以来、ずっとセンターを見守ってこられた苦労話をお聴きすることが出来ました。御礼を言って学生と記念写真をご一緒して頂きました。

ただ、地域創生という観点からは、宿泊料が廉価で新しいコンセプトのインフラを整備するか、財政面でそれが厳しいと判断される場合は、中枢都市圏構想が示唆するとおり、近隣の倉敷市や福山市など宿泊施設を有する自治体との広域連携が必要かも知れません。



星の郷ふれあいセンターの管理人さんと

(4) 中世夢が原

NHK の大河ドラマ「武蔵 MUSASHI」や映画「あずみ2」（原作：小山ゆう）など、時代劇のロケ地として有名な「中世夢が原」¹¹を訪れました。

そもそも、ここ中世夢が原は、昭和 62 年 1 月、人々の交流による地域活性化のリーディング・プロジェクトとして、美星町の「星の郷“中世吉備の庄”いきいきまちづくりプロジェクト」が自治省（当時）から内定を受けたことで、計画がスタートしています。同年 9 月～11 月には、自治省、学術スタッフ等によりリーディング・プロジェクト計画策定委員会が開催され、新・美星町総合振興計画（「星トピア 2 1」）のシンボル事業として議決されました。昭和 63 年 3 月、自治省の内定から 1 年後に正式にリーディング・プロジェクトに指定され、事業が本格的に開始されました。平成 2 年 3 月には、屋敷・農家が完成、同 7 月には神楽



山城の物見櫓（やぐら）

¹¹ “中世夢が原は、鎌倉から室町時代にかけての吉備高原一帯にみられたむらの様子を、絵巻物や発掘資料をもとに、時代考証により再現したものです。中世の門をくぐり、山肌を踏みかためてできた峠の道をゆくと、むらの入口には辻堂が建っています。あたりには五輪塔が点在し、農家では草履づくりなどのわら仕事が行われ、かまどからは炊事の煙がのぼっています。もうひとつの峠をこえると、そこには物売りの声が聞こえる三斎市のにぎわい。市のむこうには山城がそびえ、戦に備えて物見櫓や兵糧を貯えた詰所があります。山城からは領内が一望でき、山裾には武士の屋敷や城主がすんでいた「館」があります。中世夢が原はそうした中世のむらの風景と職人仕事など、生活情景を演出しています。”（中世夢が原ホームページより）

民俗伝承館が落成、平成 3 年 3 月に山城・館・砦が完成、同 10 月には、全国公募により名称を「中世夢が原」とし、キャラクターやシンボルマークも決定しました。そして平成 4 年 3 月には、お祭り広場と三斎市が完成し、同 4 月 26 日、ついに「中世夢が原」が開園したのです。ちなみに、美星天文台は平成 5 年 7 月に開館しています。

中世夢が原では、豊富な体験メニューから選んで予約をすれば、昔の遊びや生活を体験することができます。例えば、竹を小刀で削る竹とんぼ作り、ハンカチを自分で藍瓶に浸して染め上げる藍染体験（模様は割り箸や輪ゴムを使い、絞りの技術で自分だけの一品が作れる）、ラベンダーのポプリを小袋の中につめて仕上げるラベンダーのシューズキーパー作りといった手仕事体験のほか、中世の石釜を使ったピザ作り、臼と杵



中世夢が原

で餅をついて、きな粉でつくたてを食べる餅つき体験、かまどで薪を燃やして田舎汁を作る体験、そば粉を麺棒で延ばし、麺に切りゆでて、出来たてを食べる蕎麦打ち体験など、食の体験メニューも豊富です。団体向けには伝統芸能の「備中神楽」の実演などもあり、盛りだくさんな内容となっています。

施設の運営は、平成 4 年 2 月に設立された公共的団体「中世夢が原管理協会」が、美星町から管理運営業務の委託を受けました。平成 17 年 3 月からは、合併により井原市からの受託となりました。なお平成 18 年 4 月からは、指定管理者制度に基づき 5 年間運営を受託し、さらに平成 23 年 4 月より引き続き 5 年間の受託契約となり、現在に至っています。

この施設にも課題があります。筆者は、井原市の指定管理者選定委員会の委員として決算書を拝見いたしました。かなりの赤字経営となっています。これだけの規模を誇る施設ですので、黒字転換を実現するには、かなり思い切った斬新なアイデアとビジネスモデルを考えなければ難しい、との印象を受けております。

(5) 美星天文台

一行は、夕方から「美星天文台」¹²を訪問し、綾仁一哉台長から、美星天文台のあらましや、研究・教育活動、天体観測活動、そして宇宙の神秘と天文学の進化、星空の魅力について講和を頂きました。上映中は立体メガネを着用し、150 インチの大型スクリーンに 2 台のプロジェクターを使って投影される 4 D2U システムで、太陽系を始めとする宇宙の映像を見て頂きました。

¹² 岡山県ホームページより：流れ星の伝説と、その名にふさわしい美しい井原市美星町の星空。美星天文台は、国内最大級である直径 101 c m の反射望遠鏡を備えた公開天文台です。これは人間の瞳の約 2 万倍もの 光を集めることができ、誰でも気軽に望遠鏡で星を見ることができます。最高の星空を最高の条件で見ることができるように 作られたこの天文台は、初めて望遠鏡をのぞく人や、家族づれでも気軽にスターウォッチングを楽しむことができます。また、アマチュア天文家、そして高度な天体観測にも利用できます。

4D2U とは、「国立天文台 4 次元デジタル宇宙プロジェクト」の略称で、最近の天体観測のデータに基づいた宇宙の構造や進化を、コンピュータを使って立体的に映し出すシステムです。これには感動しました。目の前に星が迫ってくるリアルな感覚、まるで宇宙遊泳をしているような気分になりました。そして宇宙の構造を学ぶことができました。

続いて、「星」をテーマにした地方創生の可能性について、周辺情報を整理して美星のあり方を再確認することを目的に、地元のまちづくり団体である「ir.bisei（アイアール・ビセイ）」の川上直哉代表、地域おこし協力隊の皆さんにも加わっていただき、車座になって意見交換を行いました。綾仁台長や川上代表の、星をテーマにした地域貢献や地域おこし活動のお話に、学生たちは熱心に聞き入り、意見や質問が全員から出され、充実した時間を過ごすことが出来ました。



綾仁一哉台長や“ir.bisei”の川上直哉代表らと意見交換する学生



その後はお待ちかねの観測会です。晴天と月が隠れるという絶好の観測環境の下で、大型天体望遠鏡から見る木星は、二重のストライプがはっきり確認でき、とても綺麗でした。そして、冬から春にかけての星座の数々を観察することが出来ました。改めて、人類が存在することの奇跡と、宇宙の壮大なスケールと比較した時の自分の存在の小ささを感じずにはいられませんでした。天文知識を持つ学生たちは、口々に、観測する星座について語り合っていました。天文台関係者やお集まり下さった方々に御礼をして、宿泊先の「星の郷ふれあいセンター」に戻り、遅い夕食と入浴を済ませると、岡山大学の学生たちによる地域活動について、筆者がプロジェクターを使ってミニ講義を行い、日付が変わる時刻まで交流を深めました。

(6) 地域おこし協力隊活動拠点「栄庵梅」

翌朝は、井原市芳井町にある地域おこし協力隊¹³の活動拠点「栄庵梅」（え～あんばい＝良い塩梅という意味の方言）¹⁴を訪問し、地域おこし協力隊として活動する山脇節史さんに、着任から現在までの苦労話や成果、数々のエピソードをお話し頂きました。栄庵梅は、芳井町明治ごんぼう村にある古民家を改修し、交流施設として再生させたもので、山脇さんの住居兼活動拠点でもあります。使われなくなった高校の机やいす、跳び箱を再利用した応接セットなど、地域の皆さんの協力で完成した家屋は、夢と希望に溢れていました。



栄庵梅にて、地域おこし協力隊の山脇節史さんから話を伺う学生たち

¹³ 都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を移動し、生活の拠点を移した者を、地方公共団体が「地域おこし協力隊員」として委嘱。隊員は、一定期間、地域に居住して、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR等の地域おこしの支援や、農林水産業への従事、住民の生活支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組で、実施主体は地方公共団体、活動期間は概ね1年以上3年以下、総務省が地域おこし協力隊取組自治体に対し、おこし協力隊員の活動に要する経費等を特別交付税により財政支援を行う。（総務省資料より）

¹⁴ 「井原市芳井町花滝地区で、古民家を再生した地域交流拠点がオープンした。名前は「良い塩梅」をもじった「栄（え～）庵梅（あんばい）」。築100年近い木造平屋（約90平方メートル）の民家。地域おこし協力隊員の山脇節史さん＝福山市出身＝が昨年10月から住み込み、住民組織「芳井町まちづくり協議会」の若者グループ・縁（えにし）プロジェクトなどと協力して作業した。改修はシロアリで傷んだ床の張り替え、壁の塗り直し、シンボル看板制作・設置＝など大がかり。屋内は3部屋の和室をひと間にまとめ、広々とした交流スペースとした。公民館や集会所と異なり、地域内外から多くの人に立ち寄ってほしい＝という思いも具体化。来訪者が気兼ねなく話ができるよう、玄関を土間のある空間に改め、薪ストーブ、座布団を並べた長いいすを設けた。当面は定期的に催しを開き、住民が足を運ぶ機会を積極的につくる計画。山脇さんは今後、他地区でも空き家対策に乗り出すことから「活用方法の一つとして、参考になるような事例にしたい」と話している。6日に完成式典があり、森中秀雄・まちづくり協議会長があいさつ。関係者がテープカットして祝った。地元住民向けの見学会も開かれ、さっそく大勢のお年寄りらが来訪。屋内を見回ったり、友人とお茶を飲みながら話に花を咲かせていた。」（3月11日山陽新聞ニュースより）

学生たちからも、地域創生に関する意見や質問が活発に出されました。ちょうど梅の花が満開でしたので、庭先で記念撮影をさせていただきました。

栄庵梅を後に、最後は井原駅の構内にある地元生地を使った本格デニムショップ「D#」などを見学してから、井原市「元氣いばら創生戦略本部」を訪問、戦略策定担当の皆さんから地域創生「人口ビジョン」と「総合戦略」について説明を受けました。そして、急速に進む少子高齢化・人口減少対策の必要性について討論と意見交換をいたしました。

14. 学生たちの感想と提案

それでは、井原市を訪問した若い大学生たちの、その場での率直な感想とアイデアを以下にご紹介したいと思います。学生たちは、今後、学生として出来ることを考え、井原市の皆さまに正式にご提案する計画です。

■工学部電気通信系科 堀内 陵希

今回の井原市視察体験を通して、思ったこと、刺激を受けたことが大きく分けて2つあります。

1つは少子高齢化した過疎地域の現状を見ることができたことです。やはり我々学生や、ニュースなどのメディアを通してでしかこの現状を知らない人にとっては、あくまで「対岸の火事」のような扱いになりがちだと思います。実際に私もそうでしたが、実際に現地を訪問してみて、「本当にこんな場所が日本にあるんだな」と思い知らされました。

そして同時に、一人の若者として井原市を見たときには、心からすすんで住みたいとは思わなかったです。分かり切っていることですし、どうしようもないことですが、やはり岡山駅付近に住んでいる身としては「不便」の一言に尽きます。我々10代後半から20代は、自分の趣味に関するイベント（歌手のライブなど）があるときには、できるだけ参加したいと思うのが普通だと思います。ですが、こういったときに、圧倒的に「足」がないのは致命的で、いくらおもしろい行事があったとしても、住みたいとは思えないなと感じました。

2つ目は過疎が進んできている地域の人々の頑張りがすごいことです。もともと井原には星やその他の特産品など、他の地域も圧倒できる要素が揃っているので、なにもない過疎地域より「強みが多い」と感じました。食べ物もおいしく、夜は星が見られるし静かなところで宿泊できるという点からやはり観光や旅行に特化すべきだなと強く思いました。もう少し宿泊施設をなんとかしていただければ、そこを利用して天文部もなにかできるんじゃないかなと思います。

また社会の人々は、やはり縦の関係で動きが制限されてしまっていると言うか、どうしてもお金がないんだなというのにも身に染みて感じました。上には上の方も事情があるのだと思います。やはり社会問題化していることは簡単に解決できない、板挟みの問題だらけであることも再確認しました。

最後に我々にできることとして考えていたのは、星の解説プラスお酒や、プラス合宿のような活動がパッと思いつく動きやすいことかなと思いました。Twitterやチラシなどを通じて広報し、岡大生を中心に呼びかけることになるかなと思います。

これから新歓が始まってしまうので、一旦お休みをいただくことになるかと思いますが、これからみんなと案を出し合って考えたいと思います。

この度は大変貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

これからもよろしくお願いいたします。

■法学部法学科 福田 純也

井原市訪問での感想は、美星町は星をメインとして押し出しているという印象があったが、ir.biseiの方たちの活動を聞き、美星町を星だけでなく、様々な面から美星町のアプローチをしていて、美星町は星だけでないということを知る良い機会になった。芳井町に訪問に行った際には、井原市の合併の弊害として、中心から遠くにある地域は行政の手が届きにくく、その地域に対しての政策がなされにくいということを知った。また、その地域に住んでみないと人々がどういう思いをもって住み続けているのかが分からないことが多いということも知った。

自分は天文部として井原市のために何かできればいいと考えているため、芳井町については、何かをするというのは難しいかもしれないが、美星町で星と絡めた何か井原市を活性化できるようなことを考えてみたいと思っている。

■理学部地球科学科 戎 秀梧

1. 美星町青空市場での感想

徳山牧場ジェラートや美星バーガー等、観光の際に目玉となり得る食品は多数存在することが分かった。ただ、知名度や提供場所を増やした際の供給量の不足、更に後継者の不足などが問題として挙げられる。

2. 中世夢が原での感想

過去に大河ドラマなどで使用された施設が多数あり、ファンにとってはたまらない場所となっていると感じた。

ただ、少々古いドラマであることが問題点として挙げられる。特に、テレビを購入していないことが多い一人暮らしの大学生や、大河ドラマをあまり見ない若い世代に対して、「大河ドラマの撮影場所」というキャッチコピーだけではアピール力が弱いと感じた。

3. 美星天文台での感想

美星町には、中世から伝わる「流れ星伝説」があり、また旧地名の「星田」が示す通り、古くから星に関する関心が高いことが分かった。また、晴天率が高い、空が暗い、大気の揺らぎが小さいなど、観測条件に関しても最高に近い条件であることが分かった。さらに、街灯や住宅の照明による光害を防止するために、日本で初めて光害防止条例が制定されており、観測環境は現在でも整えられている。日本全国に対して、天文ファンを始め、全ての人々に対してアピールできるだけの条件が揃っていると感じた。

ただ、美星町内には宿泊施設が少なく、大規模イベントを行う際の大きなネックになると感じた。特に、星空観望会は夜に行うため、宿泊施設が不足すると規模を小さくせざるを得ない。また、天文台所属の職員の人数が、大規模イベントを行うには足りないことも問題点として挙げられる。

4. 地域おこし協力隊の方の話を聞いての感想

地域おこし協力隊として地域コミュニティに入る際には、やはり地域住民との摩擦があることが分かった。特に、「地域をどうしたいか」ということに関して、政府の「地域に『人を呼び寄せ』活性化させる」という考えに対して、地域住民の中には「地域から『人を出さないように』活性化させる」という考えもあり、対立し得ることが分かった。『閉じていくまちづくり』という考え方は私にはなかったので、非常に参考になった。また、先生の「東京もいずれ少子高齢化が進み、コミュニティが形成されていない分衰退は早い」という見解には、日本全国で少子高齢化が進み、問題から逃げるわけにはいかないことを強く意識させられた。

5. 元氣いばら創生戦略本部の方の話を聞いての感想

人口の減少は必然で、どのように食い止めるかが課題となっている現状を知り、高度経済成長期と同じ施策では駄目だと分かった。ただ、定住人口を増やすために、まずは知名度を上げる必要があると感じた。

6. 提案

まず、井原市全体の目的である「2060 年に人口 32,000 人」を達成するために我々岡山大学天文部が出来る事は、「星をテーマとしたイベントを行い井原市の知名度を上げる」ことであると考えます。人口を維持するために本当に必要なことは雇用の拡大や定住化への支援だが、これらを行うためにはまず人の流れを作ることが必要である。イベントを通じて訪問人口を増やす活動であれば、我々のような大学生でも参加可能である。

現在、日本人は宇宙に関して関心があることが、「はやぶさ」のエピソードが映画化したことから分かる。宇宙を感じる一番簡単な方法は星空を眺めることである。しかし、現状として街灯や照明が夜空を照らし、星が見えにくい状況となっている。特に、人口密集地である都市部はその傾向が顕著である。

美星町は、古くから星に関心があり、また全国で初めて光害防止条例を制定した市町村である。この事実を利用し、全国に広がる天文台に呼びかけて、「光害の調査」を美星天文台が先導する形で行う。その際、条例制定日の 11 月 22 日を「光害防止の日」として、当日全国一斉に光害の程度を調べるようなイベントを行う。

また、「光害防止サミット」と題して全国の天文台関係者や天文ファンを集め、報告会と観望会を開く。その際発生し得る宿泊施設の不足に関しては、キャンプ場などを利用し、テントを用いれば対策可能である。冬の場合テントで一晩過ごすのは大変なので、夏休みの時期に行うのが妥当である。この時井原市の名産をアピール出来ればなお良いと思った。

■工学部情報系学科 西 良太

1. 概要

今回の視察体験にて、美星天文台や中世夢が原などの観光資源と過疎地における地域活性化の活動を視察した。また、井原市の人口動向、将来の人口推移と「元氣いばら まち・ひと・しごと創生 総合戦略」の概要を学習した。これらを踏まえたうえで岡山大学天文部として井原市の地方創生にどのように取り組むことができるかを考察する。

2. 井原市の観光資源に関する考察

まず初めに「元氣いばら まち・ひと・しごと創生 総合戦略」の基本目標として掲げられている「井原市への新しい人の流れを作る」という項目に注目したいと思う。

視察体験では美星天文台を見学させていただいたが、「美しい星空」は人を呼び込み交流人口を増やすために十分活用できる観光資源だと思った。総合戦略の具体的施策にも「美しい星空」の活用は含まれているため、これに関連したイベントの開催が新しい人の流れを作るために有効なのではないかと思う。これについては美星天文台にて「ir.bisei」の川上さんからお話を伺った通りこれまでも星空を活用したイベントは開催されていた。しかし、美星地区にアクセスするための交通手段や宿泊施設の不足は課題だと感じた。特に交通手段は「美しい星空」を観光資源としているにも関わらず公共交通機関が利用しにくいのは自動車を利用できない人の呼び込みを妨げているのではないかと思った。よって、イベント開催時には1 往復のみでも井原市の中心部である井原駅から天文台までの臨時バスの運行などが出来れば良いのではないかと思った。中心市街地と観光資源を有する田舎の地域をつなぐことで、宿泊客の増加なども見込めるのではないかと思う。

3. 井原市での活動案

次に、天文部として井原市を盛り上げていくためにはどのような活動ができるかを考える。私たち学生の力だけで「新しい人の流れをつくる」というのはやはり難しいところがあると思う。よって、「地域に住む人たちに井原市の良さを再確認してもらう」というのを活動の目的とするのがよいのではないかと思った。この活動で、人々の郷土愛を育むことにも繋がり「元氣いばら まち・ひと・しごと創生 総合戦略」にも貢献できるのではないかと思う。

天文部としては、やはり「美しい星空」を活用した活動を行うのが良いと思う。具体的には、地域の人々を対象とした星空の観望会を開催することである。

井原市星空公園は日本の星の三選にも選ばれており、ここで小型望遠鏡や対空双眼鏡を用いた観測会を開き地域の方々に来てもらうことができればよいのではないかと思う。ここで地域の子供たちにより多く来てもらって、地元のすばらしさを知ってもらうとともに学習してもらえるようなイベントにすることができればより良いのではないかと思う。

また、もう一つの案として芳井地区には地域おこし協力隊の山脇さんの交流拠点施設「榮庵梅(えーあんばい)」があり、ここの庭で地元の人と星を見ろというのもよいと思った。

これらの活動をするにあたって、可能であれば地域でがんばっている ir.bisei さんや地域おこし協力隊山脇さんなどと協力した活動にできればなお良いのではないかと思う。

以上のように、私は地域の人々に天文を通じて地元の良さを再確認してもらうということに重点を置いた活動をしてみたいと思った。

4. 感想

最後に一泊二日で井原市の視察体験を行って感じたことをまとめる。まず、一日目に見せていただいた中世夢が原と美星天文台はすばらしい観光資源だと思った。中世夢が原は営業時間の関係上じっくり見ることはできなかったが、パンフレットにあるようなお箸づくりや備中神楽観賞など様々な体験を試みた

いと思った。また美星天文台では、台長さんによる講和を聞くことができ素晴らしい星空も体感出来てよかった。ir.biseiさんの活動についてもお聞きして、自分たちも力添えしてみたいと思った。

翌日は、「元気いばら まち・ひと・しごと創生 総合戦略」についてお聞きしたが、人口減少の深刻さを数値データを見て思い知った。掲げられている4つの基本目標もすべて本気で取り組んでいかなければ目標人口を達成するのが難しいだろうことも想像できた。井原市の現況を知り、私たちも微力ではあるが創生活動に関わることができれば嬉しいと思う。また、地方創生に関わることは自分たちの社会学習ともなり大いに成長できるのではないかという思いもあり、活動に取り組んでみたいと強く思う。

■理学部数学科 河野 紗也花

井原市、特に美星町の第一印象の感想としては、平日だったのもあるかもしれませんが人が少なく静かな町だと思いました。車の数も少なく、人をあまり見かけなかったように感じました。正直、こういった町にどのようなことをしたら活気が出るのかとてもことだと思いました。しかし、ir.biseiの方々の活動を知り、若者や他の地域の人々の興味を引きそうな活動やそれを知らせるためのおしゃれなポスターがあることを知り私自身もとても興味を持ちました。しかしそれらを外部の人々に知らせるためのお金も人も無いというのを聞いて、あんなにおしゃれで素敵な企画やポスターがあるのにとてももったいないと感じました。私は地元が尾道で高校は福山市に通っていたのですが、高校の友人や家族に美星町の話をしてマークが浮かんでいるくらいあまり知られていません。こういった活動をより多くの人に知らせるにはSNSをもっと使って様々なタイプの人たちに知らせていくことが重要だと思います。

また、ir.biseiのメンバーは男性の方が中心になっていると伺いましたが、もっとタイプが違う人、例えば若い女性の方男性の方など、様々なタイプの人々と交流をしたらこれ以上のもっと新しい発見や企画が生み出されるのではないかと思います。そのためには、井原市の市役所でも提案させていただいたのですが、地元の高校生や中学生に授業の一環でも考える機会を設ければ良いのではないかと思います。生徒たちにとっても自分の地元のことをよく知る良い機会になると思いますし、そのような活動をするにより自分自身の将来の選択が広がるかもしれません。

これからも参加して色々なことに参加させていただきたいです。

■薬学部 松本大輝

今回の井原市の視察において大変お手数かけてもらい申し訳ありませんでした。貴重な経験をさせていただきありがとうございます。以降その時の感想を述べていきます。

今回の視察について、僕は今までに美星町の存在を知っていましたが行ったことがなく天文部として行ってみたいと思っていました。美星町の名前はかなり周りの知人も知っていたためとて有名な観光名所の一つでにぎわっているものだと思っていました。しかし、今回の視察や井原市の話聞いてみて、芳井町の人の不足、井原市全体の人口の流出が止まらないこと、せっかく美星天文台の他にも近くに中世夢が原という中世の暮らしをクオリティ高く再現しているのに客寄せにもう少しインパクトが必要など様々な悩みを抱えていることを聞いて自分も生まれが人口の減少が止まらない県であることからとても共感でき、もっと生かしていく手段はないものだろうかと思いました。

今回視察をしてみて初めて知ったのですが井原市には、とてもおいしいジェラートや、美星バーガー、芳井町（栄庵梅）で作られるゴボウなどのおいしい食べ物の他に、地元の生地を使ったジーンズなど井原市が誇ることでできるブランドが存在していることを知りました。しかしこのまま過疎がつづく後継者不足などで衰退していくのではないかとするとすごくもったいない気持ちになりました。

芳井町における山脇さんの地域創成の話を聞いてみて、まず本部を作ることから始められたと聞いてとても驚きました。もう使われていない家を使って人に使ってもらうなんていう甘い考えを持っていましたが、それを使えるようにするためには莫大な手間がかかること、また地域に残っておられる方々のみんな人が来てほしいと思っているわけではなくそっとしてほしいと考える人もいると聞いて一筋縄ではない困難なことに思えて、地域創成とは人の多いところから引っ張って来ればよいというだけではダメなのだと考え方が変わりました。

市の話を聞くとときのパンフレットを拝見してみたところ、市を盛り上げようと毎月祭りをされていて、暮らしていてつまらないことは何もないのだと思えました。今の地域に行きたくない人は、田舎で何もやることなく便も悪いからと決めつけていると僕は思いますので、いかに井原市が住みやすい場所か宣伝できるかが大事なのではないかと思います。

次に今回の視察で僕の思いついたことを述べていこうと思います。

1. 天文台と中世夢が原などの施設との連携

少し学生だけでは手に余りますが、修学旅行の場所として中世夢が原で歴史について体験できる機会を使って夜には星空を眺めてもらい、中世の時代では光がないため、美星地区が最も昔の夜空を再現していることを伝えて、僕らが可能なら星の解説などを手伝います。その後現代の技術（望遠鏡など）を使うとこんなにもはっきり星をみえるようになると、進歩を感じてもらいます。4D2U システムなど使うとはっきりわかるとおもいます。

また、廃校を宿泊施設にしたところを使って泊まってもらったりしていただく是一般のお客様の受けもいいと思います。（現に僕が泊まってみて懐かしくとても落ち着けました。）

2. Twitter での広報

広報の話を聞いてみるとおもに face book で行われているとききました。ですがぼくの考えだとより若者を集めようと思ったら twitter などのすこし軽い SNS を広報に使ってみるのもいいと思います。その時は僕らで情報を拡散しようと思います。

3. 簡易望遠鏡づくりワークショップ開催（主に子供目当て）

星空を天文台の大迫力ものを使って観測することはとても楽しいですが、どうしても順番を気にしたり、自分の見たいものを見たい時に見ることができないということがあがあると思います。そこで手作り（材料はあまり高価ではないものを使用）で観測に来た人たちに作ってもらおうということを考えました。自分で苦労して作ったもので観測する夜空は一味違って印象にも残るのではないかと思います。その場合は僕たちが作り方のレクチャーや手伝いをしようと思います。

以上がぼくの考えたアイデアです。このたびは貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。



15. 中枢都市圏構想：井原市の近隣自治体

さて、地方創生を実現するには、自治体単独の努力だけでは足りません。長期的展望に立ち、近隣自治体が相互に連携する中枢都市圏構想が必要になって参ります。最後に、井原市の近隣にはどのような表情を持つ地域が広がっているのか、いくつかの「見どころ」をご紹介します、今後の検討につなげたいと思います。

(1) 矢掛町： 山陽道の旧宿場町

平成 27 年 5 月 13 日、井原での仕事帰りに、隣町の小田郡矢掛町（やかげちょう）に立ち寄りました。矢掛町は山陽道の旧宿場町であり、本陣や脇本陣をはじめ、歴史に彩られた古い町並みが保存されています。また、隣の真備町（まびちょう）（現在の倉敷市）と吉備真備（きびのまきび）の生誕地を主張しあっているようですが、この地域で生まれたことに間違いないと立証されています。わずかな時間の立ち寄りでしたが、この地方にはわが国の古代からの貴重な時間が息づいています。歴史をさかのぼってタイムスリップしたような、不思議な気持ちにさせてくれる魅力的な町です。

井原市とは同じ小田川流域であり、両地域のいっそうの連携強化を望みます。



矢掛町の街並み

(2) 笠岡市「カブトガニ博物館」

絶滅が危惧されている活きた化石「カブトガニ」が、瀬戸内海に面した笠岡市立「カブトガニ博物館」¹⁵で飼育されています。そこには、世界の全種類のカブトガニを中心に、生物進化の歴史、恐竜の骨格模型とその生態模型などが展示されています。また、博物館は公園

¹⁵ 笠岡市ホームページ：今地球上に生きているすべての生物は、地球 46 億年の歴史が創り出した環境の中で出現し、環境の変化に適応して進化してきた。そして競争と共生の関係をもちお互いに影響しあいながら環境をつくりあげて生き残ってきた。カブトガニ博物館は、中生代に現在の姿形になったカブトガニと中生代に出現しその末期には滅びてしまった恐竜を配置して「カブトガニは、現在まで生き残ったのに恐竜はなぜ滅びたのだろうか？」「生き残ったカブトガニが、なぜ現在絶滅の危機に直面しているのだろうか？」と問いかけている。その答えを探すキーワードは「生物にとって自然環境は、非常に大切なかけがえのないものである。」ということである。それぞれの生物がどのような環境の中でお互いに影響しあいながら生態系をつくり、生きているのかを観察し学ぶことができる場所を提供することも博物館の役割である。人間も生物界を構成する一生物であり、自然の仕組みが分かった上で自然保護や環境保全の学習ができる博物館でありたいと願ってこの公園を造った。

になっていて、恐竜の模型が置かれたり、古代種の植物が植えられたりして、ジュラシックパークのような雰囲気です。古代の地球の歴史を、カブトガニや古代種の植物を観察することで学ぶことを教えてくれています。同博物館のパネルによると、このカブトガニ保護の必要性を語られたのは昭和天皇であり、愛媛県西条市（旧壬生川地区：東予沿岸）にて、その生息地の開発によりカブトガニが絶滅の危機に瀕していることを危惧されたことが記されています。

悠久の時を超えて今に生きるカブトガニを眺めながら、太古の生物が地球で息づいていた世界に思いを馳せました。



笠岡市立「カブトガニ博物館」

(3) 「道の駅 笠岡ベイファーム」

笠岡市の国道 2 号線を西へ向かうと、途中に「道の駅 笠岡ベイファーム」があります。ここには平成 27 年 5 月 4 日に訪れました。ゴールデンウィーク中で、大勢の人たちで賑わっていました。この道の駅は、とりわけ地域の物産にこだわっています。瀬戸内の魚介類、野菜、穀物、果物、その加工品、さらに笠岡諸島北木島産の花崗岩「北木石（きたぎいし）」などが並び、地元産の商品には「かさおかブランド」の認定を行っています。

また、オリンピック選手を輩出する女子バレーチーム「岡山シーガルズ」の本拠地とあって、T シャツも売られています。

全国で多くの道の駅を訪ねましたが、ここ笠岡ベイファームは、私などにも欲しい商品が目白押しでした。道の駅のような場所が活気づいているのは、まちが活性化している証拠です。井原市と笠岡市、ぜひ広域で連携して、ますます「元気印」のまちになって頂きたいと願いました。



道の駅 笠岡ベイファーム

まとめ

現代社会において、コミュニティと地域社会は密接に関連しながら変化してきました。井原市では、例えば、企業誘致が進んだ「木の子地区」はその象徴と言えます。ここでの生産活動や、隣の福山市、倉敷市のコンビナート企業での雇用創出を原動力として、地域経済は急速に発展を遂げました。これらの地域はいまなお、井原市の地域経済の牽引役としての機能を担い続けています。その一方で、古くから農業や果樹業、畜産業を中心に営まれ、自然と地域社会を基盤としていた暮らしは、産業構造の転換に伴う企業組織優先のライフスタイルへと変貌し、伝統的なコミュニティは衰退を余儀なくされることとなりました¹⁶。さらに住民の生活は、新たに流入した人たちと古くからの住民との生活習慣の違い、交通網の発達とモータリゼーションの進展による生活圏の拡大、グローバル化や情報化社会がもたらす生活スタイルの変化により、大きく影響を受けることとなりました。こうしたなかで、かつて栄えた商店街も当時の輝きを失い、シャッターが並ぶ閑散とした姿へと変わってゆきました。井原市の商店街も衰退の一途を辿ったと思われます。

また家族や個人の単位を中心としたライフスタイルが定着し、住民同士の結びつきは徐々に薄らぎ、地域コミュニティへの関心も後退しつつあります。その反面、今回の地域創生への取り組みにより、現代コミュニティは新たな地域社会や地域経済の持続的な発展を求めて動き始めました。それは伝統的なコミュニティの復活や回帰を求めるものではなく、住民の自立と共生によって成立しようとする新たなコミュニティ創生への歩みです。

こうしたなか、経済成長を支えてきた原動力のひとつともいえる企業への忠誠心を基盤とした企業社会は、国際競争の激化や長引く不況への対抗の結果とも言える労使協調関係の深まりという形で絆を強めるなかで、「企業社会と地域コミュニティ双方が共生できる社会をいかにして創造するか」という新たな課題を提起しています。また、地域コミュニティでは、住民の思考は多様化し、高度成長の頃にみられた一元的な価値観だけでは、物事は解決しない現実気づかされます。つまり、現代コミュニティに活力を取り戻すためには、住民の多様化した価値観やライフスタイルを所与のものとして甘受したうえで、同一のコミュニティエリア（井原市の場合はコミュニティ会議の活動）で共に生活を営むという共通性を基盤として、生活環境の中から発生する社会的課題を、住民や企業、そして自治体やそれに連なる団体が共に解決していけるような組織的活動を生み出すことが求められています。

つまり、現代コミュニティの形成とは、住民の主体性から湧き起こる参加意識と行動により、住民の意思を、地域経済の成長を支える企業や公共政策の担い手である国や自治体に伝え、かつ、反映させてゆくための常態的な仕組みを形成することに他ならないのです。また、それをサポートするために、自治会や町内会、NPO や関係団体、そして大学など教育機関

¹⁶F. テンニースが説く、社会は「ゲマインシャフト（共同社会＝人間的な絆による結合を重視した社会結合）」から「ゲゼルシャフト（利益社会＝多様な利害により結合した契約的な集団）」へ移行した、という考え方や、R. M. マッイキーバーが唱えた「コミュニティ＝社会的な存在の共同生活の焦点」と「アソシエーション＝ある共同の関心または諸関心の追求のために明確に設立された社会生活の組織体」の違い、などの諸理論が、しばしば参考にされます

が、こうした活動に共感・共鳴してコミュニティの形成に参加することが大切になっています。

今回の総合戦略では、これまでの既成概念にとらわれない次世代の地域社会の創造に向けた新たな流れが生まれつつあります。それは官民の新しい関係構築を模索する動きです。これまで公共インフラを合理的に整備する組織であると理解されてきた行政システムが、国民の多くからその組織疲労を指摘されるようになりました。官の視座からは、国と自治体（県や市町村）における役割責任の分担・分離、さらに道路行政と交通行政の機能分離に代表される組織的課題が、行政に対するガバナンスの問題として顕在化しています。すなわち、地方創生の推進と相まって官民の機能見直しが論議される過程にあって、中央官庁における縦割りの組織構造がもたらす担当外業務への相互不介入、さらには国と地方行政の重層構造が招く意思決定と責任所在の曖昧さが、真の意味で市民のニーズを反映していないとの疑問が呈され、それに応えるために地方創生本部が設置されたといえましょう。

一方、民間（市民）も行政任せ、行政責任にして、“まちづくり”が抱える様々な課題に対して沈黙を守るケースが多かったのも事実です。この点は「物言わぬ住民」という市民側の課題として指摘されてきました。こうした従来型の意思決定プロセスや発想に基づくまちづくり施策やコミュニティ政策では、市民のニーズに適応した地域社会の再生はできない、との議論が主流となり、いま、過去からの反省に立つ新しいスタイルのまちづくりが生まれつつあります。井原市の総合戦略においても、都市の持つ歴史、文化、デニム産業、ブドウ栽培など、地域社会が育て、受け継いできた「地域固有の価値」を起点として、新たなまちの魅力を市民参加型で高めようとする考え方が生まれました。

すでに岡山県内の複数の地域で、地域創生活動を展開する上で、地域住民が、まちづくり NPO やまちづくり団体と連携して、計画策定から運営まで参加する枠組みをつくる事例が報告されています。公と私、その中間をどのように充実させていくのか。もはや地域活性化の議論は、コストの問題を含め、市民参加なくしては議論できないところまで来ているといえましょう。井原市においても、「美星空宙ガールズミーティング」、「井原線 DE 得得市」はじめ、自治体と市民の協働による様々なイベントが開催され、多くの来場者で賑わっています。そこへは若者や家族連れはもとより、様々な人たちが集い、井原市は側面から支援活動を展開しています。いまこそ、地域固有の歴史や生活文化、そして自然環境を活かして人々の心を紡ぎ、地域の共有財産としてのインフラの価値を再発見できるような取組みが必要なのです。そうした取組みの中で、次世代に引き渡せるまちとの観点から、成熟した議論を積み重ねることが大切になっています。

地域社会や経済の活性化を考えると、これからのまちづくりには、こうした自由な発想が大切であり、井原市の総合戦略の策定のプロセスでは、市民のニーズを取入れ、合意形成を図るためのアンケート調査やワークショップが行われました。すなわち、新しいまちづくりを志向する際に留意すべき点があります。それは、地域における諸活動が、個々独立した事象として運営、或いは開催されることは、統合的なまちのランドデザインを描く上で、

また、まちづくりの観点からみても、限られた活動資源の散逸となるケースが多いということです。本来、それぞれの組織・団体が独自の個性を発揮しながらも、コミュニティ・デザインの形成という一点にかけては、同一ベクトルを保持しながら進むことが望ましいのです。なぜなら、最初は何気ないベクトルの相違が、時として大きな対立軸を生み出し、まちづくりの效果的継続性の阻害要因となることが往々にしてあるためです。それを避けるためにも、これからは地域コミュニティの果たすべき役割や責任を明らかにし、具体的な手順や手法を社会に定着させることが重要となります。個人の利益・利害は前提としながらも、「地域にとって大局的な見地で何が必要かという共通軸を維持しながら論議を進めること」が、最終的に地域に関わる人々全体に幸せをもたらすのです。つまり、こうした課題を解決するために、まちの主役たる住民（市民）自らが責任を果たしながら、「産官学金労言」合意に基づく「協働」によるまちづくりの実践に向けて、知恵を出し合う時代が到来しているのです。

わが国では、互いに隣人同士が心にゆとりを持ちながら豊かな社会生活をおくるためのルールとして、公德心や譲り合いの精神が大切にされてきました。現代社会は、社会全体が経済、すなわち企業の成長や自己の利益を優先するあまり、こうした日本人が古来より受け継いできた品格までも失いかねない危険な状態にありはしないでしょうか。とりわけ、公益性意識の低下は、コミュニティにおける生活の共存性を脅かしつつあると言えましょう。近代社会においては、人には皆、平等に生存権や幸福権、さらに移動権が保障されるべきです。生活スタイルの多様化とともに、万民に対して持続的にこうした権利が確保される都市計画、交通計画、産業計画が展開されることが理想です。すなわち、コミュニティを形成する住民一人ひとりが、自分の思いを実現しつつ、しかも他人の立場を尊重しながら共存・調和できる社会が希求されています。本格的な少子高齢社会を迎えた今こそ、そのようなまちの実現に向けて「産官学金労言」が連携しながら邁進すべき時期が訪れていると言えましょう。

そこでの「官」、すなわち行政の役割は、こうした議論に市民が自由に参加できるよう、基礎的なデータや資料、さらにはリーサスデータなどを用意し、それぞれ意見や立場の異なる市民同士がそれぞれのニーズや問題意識について相互に理解できる機会を提供することです。そして具体的に議論が進むよう、計画の指針となる独自の評価基準を提示することでありましょう。そこでは、現在のまちが抱える都市計画、交通計画、産業計画など多岐にわたる課題と解決の方向性について、複数のシナリオやビジョンを提示し、そのメリット、デメリットの対比、地域にもたらす経済的な効果、自然環境や景観などに対する影響など、市民の関心の高いテーマに基づいて相互に議論がしやすくなるような工夫と作業が求められます。人は自分の住むまちの良さを継承しつつ、新たな地域づくりを行いたいと望むものです。これから先の世代に残すもの、託すものは何で、新たに地域経済を活性化できる可能性を秘めた取り組みが何であるかを考えることが、まずスタート地点です。

最後に「学」の果たす役割について述べます。地方創生においては、大学教員が有識者として、行政とも市民とも異なる立場からアドバイスを行うことが求められています。そのた

めには、コミュニティ政策の観点から市民と行政との意見交換がスムーズに行われることを目的に住民ニーズをリサーチし、行政の描いた計画を市民に平易に翻訳して提示する役割を果たす第三者的専門機関をとして参加するという手法が有効です。さらに、教育機関でもある大学は、そうした場へ学生を三角させ、企画から運営までを経験する機会を創造する必要があります。そこでは、学生達が自主・自立的に実践的な活動や学びを通じて地域の課題を考え、その解決に向けた活動を通じて「実践知」を身につけることこそが重要となります。地域経済の担い手として、こうした人材を地域社会や企業へ送り出すことが、これからの大学が担う重要な使命となるのです。このたびの井原市での学生による視察は、地域の現状を知り、課題を発見する糸口とすることができました。

平成 28 年度は、こうした取組みを今後とも意識・実践しつつ、地域創生「人口ビジョン」に基づく「総合戦略」展開への歩みを進めるべく、地方創生人材支援制度での派遣者として使命を全うしたいと考えています。

(了)